



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（91-105）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2019, 17, p. 1-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳
(91-105)

池田 修

al-Mufaḍḍaliyyāt Translated (91-105)

IKEDA Osamu

抜 刷

「アラブ・イスラム研究」第17号 2019年

Journal of Arabic and Islamic Studies

مجلة الدراسات العربية والإسلامية

Vol. 17, 2019

アルムファッダリーヤート試訳

— (91) アーミル・アルムハーリビー・アルハサフィー —

عَامِرُ الْمُحَارِبِيِّ الْخَصَفِيِّ

池田 修*

まえがき

この人物はムハーリブ (Muḥārib) 族の一員で、アーミルという名の男であるが、詳しい血筋は分かっていない。この詩は No. 90 のアルフサインに対する、ムハーリブ族の詩人であるアーミルの返答である。

ムハーリブの祖はハサファ・ブヌ・カイス・ブヌ・アイラーン (Khaṣafa b. Qays b. ʿAylān) とされているが、詳しい情報はほとんど伝えられていない。

彼らはタイイ族とハワージン族のあいだの上アルカシム (al-Qasīm) 地方のサルマー山に住んでいた。この詩の背景を理解するためには、No. 12 および No. 90 の詩が参考になる。この詩では、戦いに誘いながら、和解しようとするズブヤーン族を非難し、自部族の栄光を誇り、最後の所でアルフサインを中傷し、脅迫している。アルフサインの詩の内容と矛盾している点が注目される。タウィール調、29行。

(91) テキスト

قَالَ الْخَصَفِيُّ مِنْ مُحَارِبٍ، وَأَسْمُهُ عَامِرُ الْمُحَارِبِيِّ

- | | |
|---|--|
| وَسَعَدَ بَنُ دُبْيَانَ الَّذِي قَدْ تَحَتَّمَا | ١- مَنْ مُبْلَغٌ سَعَدَ بَنُ نُعْمَانَ مَأْلِكًا |
| وَإِذْ سُعِطُوا صَابًا عَلَيْنَا وَشُبْرُمَا | ٢- فَرِيقِي بَنِي دُبْيَانَ إِذْ زَاغَ رَأْيُهُمْ |
| إِلَى السِّلْمِ لَمَّا أَصْبَحَ الْأَمْرُ مُبْهَمًا | ٣- جَنَيْتُمْ عَلَيْنَا الْحَرْبَ ثُمَّ ضَجَعْتُمْ |
| عَلَى دَهْشٍ، وَاللَّهِ، شَرِبْنَا أَشْأَمًا | ٤- فَمَا إِنْ شَهِدْنَا حَمْرَكُمْ إِذْ شَرِبْتُمْ |
| يَظْلُ بِهَا الْغُفْرُ الرَّجِيلُ مُحْطَمًا | ٥- وَمَا إِنْ جَعَلْنَا غَايَتَيْكُمْ بِهَضْبَةٍ |
| فَقُلْنَا لِيَرَمَ الْخَيْلَ مَنْ كَانَ أَحْزَمًا | ٦- وَمَا إِنْ جَعَلْنَا بِالْمَضِيقِ رِجَالَنَا |
| رَبَطْنَا لَهُ جَأْشًا وَإِنْ كَانَ مُعْظَمًا | ٧- وَيَوْمَ يَوْدُ الْمَرْءُ لَوْ مَاتَ قَبْلَهُ |
| بَنِي عَامِرٍ إِذْ لَا تَرَى الشَّمْسُ مَنْجَمًا | ٨- دَعَوْنَا بَنِي ذُهْلٍ إِلَيْهِ وَقَوْمَنَا |
| عَنَاجِيحٍ يَحْمِلُنَ الْوَشِيحَ الْمُقْوَمَا | ٩- وَيَوْمَ رُجِيجٍ صَبَحَتْ جَمْعَ طَيِّئٍ |

* 大阪外国語大学 名誉教授

〔池田修先生のご意向により、本号掲載の「試訳」校正は高階が担当しました。〕

- ١٠- نُرَاوُحُ بِالصَّخْرِ الْأَصَمِّ رُؤُوسَهُمْ
 ١١- وَإِنَّا لَنُنْفِي الْخَيْلَ قُبًا شَوَازِبًا
 ١٢- وَنَضْرِبُهَا حَتَّى نُحْلِلَ نَفَرَهَا
 ١٣- أَتَغْلِبَ لَوْلَا مَا تَدْعُونَ عِنْدَنَا
 ١٤- لَقَدْ لَقِيتَ شَوْلَ بَجَنْبِي بُوَانَةٍ
 ١٥- فَأَبَقْتُ لَنَا آبَاؤُنَا مِنْ تُرَاثِهِمْ
 ١٦- وَنُرْسِي إِلَى جُرْثُومَةٍ أَذْرَكْتُ لَنَا
 ١٧- بَنَى مَنْ بَنَى مِنْهُمْ بِنَاءً فَمَكَّنُونَا
 ١٨- أُولَئِكَ قَوْمِي إِنْ يَلْدُ بَيْتُوتِهِمْ
 ١٩- وَكَمْ فِيهِمْ مِنْ سَيِّدٍ ذِي مَهَابَةٍ
 ٢٠- لَنَا الْعِزَّةُ الْقُعْسَاءُ نَحْتَطِمُ الْعِدَى
 ٢١- هُمْ يَطْلُونَ الْأَرْضَ لَوْلَاهُمْ أَرْتَمْتُ
 ٢٢- وَهُمْ يَدْعُمُونَ الْقَوْمَ فِي كُلِّ مَوْطِنٍ
 ٢٣- يَقُومُ فَلَا يَغِيَا الْكَلَامَ خَطِيبُنَا
 ٢٤- وَكُنَّا نُجُومًا كُلَّمَا أَنْقَضَ كَوْكَبٌ
 ٢٥- بَدَا زَاهِرٌ مِنْهُمْ تَأْوِي نُجُومُهُ
 ٢٦- أَلَا أَيُّهَا الْمُسْتَحِيرِي مَا سَأَلْتَنِي
 ٢٧- فَمَا يَسْتَطِيعُ النَّاسُ عَقْدًا نَشُدُّهُ
 ٢٨- يُعْنِي خُصَيْنٌ بِالْحِجَازِ بَنَاتِهِ
 ٢٩- وَإِنَّا لَنَشْفِي صَوْرَةَ التَّيْسِ مِثْلَهُ
- إِذَا الْفَلْعُ الرُّومِيُّ عَنْهَا تَثَلَّمَا
 عَلَى الثَّغْرِ نُغْشِيهَا الْكَمِيُّ الْمُكَلَّمَا
 وَتَخْرُجُ مِمَّا تَكْرَهُ النَّفْسُ مُقَدَّمَا
 مِنَ الْحِلْفِ قَدْ سُدَى بَعْقِدٍ وَالْحِمَا
 نَصِيًّا كَأَعْرَافِ الْكُوَادِنِ أَسْحَمَا
 دَعَائِمَ مَجْدٍ كَانَ فِي النَّاسِ مَعْلَمَا
 حَدِيثًا وَعَادِيًّا مِنَ الْمَجْدِ خَضْرَمَا
 مَكَانًا لَنَا مِنْهُ رَفِيعًا وَسَلَمًا
 أَخُو حَدَثٍ يَوْمًا فَلَنْ يَنْتَهَضَمَا
 يُهَابُ إِذَا مَا رَأَيْدُ الْحَرْبِ أَضْرَمَا
 بِهَا ثُمَّ نَسْتَعْصِي بِهَا أَنْ نُحْطَمَا
 بِمَنْ فَوْقَهَا مِنْ ذِي بَيَانٍ وَأَعْجَمَا
 بِكُلِّ خَطِيبٍ يَتْرُكُ الْقَوْمَ كُظَّمَا
 إِذَا الْكَرْبُ أَنْسَى الْجِبْسَ أَنْ يَتَكَلَّمَا
 بَدَا زَاهِرٌ مِنْهُمْ لَيْسَ بِأَقْتَمَا
 إِلَيْهِ إِذَا مُسْتَأْسِدُ الشَّرِّ أَظْلَمَا
 بِأَيَّامِنَا فِي الْحَرْبِ إِلَّا لَتَعْلَمَا
 وَنَنْقُضُهُ مِنْهُمْ وَإِنْ كَانَ مُبْرَمَا
 وَأَعْيَا عَلَيْهِ الْفَحْرُ إِلَّا تَهَكَّمَا
 وَنَضْرِبُهُ حَتَّى نَبْلَّ أَسْتَهُ دَمَا

(91) 訳

- 1- 誰が（私の）書状をサアド・ブヌ・ヌアマーンと（尊大な王のように）ターバンを巻いているサアド・ブヌ・ズブヤーンに届けてくれるか¹⁾。
- 2- すなわち、ズブヤーン族の二支族に（届けてくれるか）。何故なら²⁾、彼らの意見は的外れで、我らの鼻にアロエとシュブルムの苦汁を入れたからである。
- 3- お前たちは不当にも我らに戦争を課し、やがて、事態が混迷すると和解へと傾いた。
- 4- お前たちが分別をわきまえずブドウ酒を飲むとき、我らは同席しない。神に誓って、凶運の飲み物であることよ。
- 5- 我らはお前たちの二本の旗を、足が達者な野生のカモシカの子が滑り落ちて、粉々

1) サアド・ブヌ・ヌアマーン (Saʿd b. Nuʿmān) という人物の血統は不明であるが、サアド・ブヌ・ズブヤーン (Saʿd b. Dhubyān) はサフム、シルマ両家の祖先にあたる。アラブはイカル (ʿiqāl) とよばれる輪で頭巾を押さえているが、有力者は祭式などでターバンを巻いている。

2) ズブヤーンの子らの二支族とは、対立したサフム、シルマ両家のことであろう。shubrum はタカトウダイ科の植物。

- になるような山頂に立てたのでもない³⁾。
- 6- また、我らは隘路に伏兵をおいて、“もっとも慎重な者があの騎士を射よ”と命じたのでもない。
 - 7- 今日より前に死んでおればよかった、という日が人には何と多くあることか。だが、我らはそれがたとえ大難の日であっても、心を引き締めて対応する。
 - 8- 我らはそれに備えて、バヌー・ズフルと我らの民バヌー・アーミルをまねいたが⁴⁾、太陽が昇るのが見えなかった。
 - 9- ルジャイジュの戦いの日⁵⁾、我らは朝、タイイの軍勢を襲った。首の長い駿足の馬が槍を立てて進撃した。
 - 10- 我らは彼らの頭を固い岩に次々と風ぎ飛ばし、そのため、ビザンツ鉄の剣はぎざぎざに刃毀れした。
 - 11- 我らはお腹が細い馬の体を、危険な場所で曲げて、(敵の) 負傷した(動けない) 勇士の攻撃から身をかわした。
 - 12- 我らは、ひるむ馬に鞭を当て嫌気をとき、目をそむけるような戦場へと、まっしぐらに前進させた。
 - 13- サアラバよ、お前が我らに主張する、縦糸と横糸で固く結ばれた契約に基づく同盟の誓いが無かったならば(我らはお前たちと争っていただろう)⁶⁾。
 - 14- 乳が枯れた雌ラクダがフワーナ丘の両側面で⁷⁾、荷駄馬のたてがみのように密生し、長く伸びた濃緑色の草を見つけた。
 - 15- 我らの祖先は彼らの遺産として、人々の標識となる栄光の柱を我らに残してくれた。
 - 16- 我らは、我らのもで成熟した大樹の根元に固いつながりを持ち、アードの時代から今日までの功績は多大である⁸⁾。
 - 17- 彼らの一人は栄光の館を建てて、我らの住まいとしてくれたが、それは高くそびえ、上り階段がつけられている⁹⁾。
 - 18- これらがわが部族である。災難にあったものが彼らの住まいにいつの日か避難して来れば、彼らは決して粗略に扱わないであろう。
 - 19- 戦いの先駆者が山上にのろしをあげるとき、彼らの中にはなんと多くの恐るべき首領らが控えていることか。
 - 20- 我らには確固たる力が備わっており、それによって敵の鼻を打って辱めるが、我らの鼻への打撃はその力で断固はねつける¹⁰⁾。
 - 21- 彼らは大地を堅固にし、不動のものとする。もし、彼らがいなかったら大地の上の、

3) この行は「我らとお前たち両者は、はるかに離れているのではなく、交じり合って住んでいる」の意。

4) バヌー・ズフル (Banū Zuhl) はムハーリブの支族、バヌー・アーミルの血統は不明。

5) ヤウム・ルジャイジュ (Yawm Rujayj)。この戦いはよく分からないが、ムハーリブがタイイを破り、見せしめの懲罰を加えたことになっている。

6) サアラバ・ブヌ・サアド (No. 90 の注7) 参照) との同盟があったので争う余地がなかった、と思着せがましいことを言っている。なお、suddā はタイイの方言で suddiya「織物に縦糸をかける、恩恵をさずける」のこと。

7) ブワーナ (buwāna) はムハーリブ領の丘陵地で紛争地とは離れており、平穏に家畜に牧草を食べさせられる、と言ったもの。

8) 血統が古代より連綿とつながっている、と言っている。

9) 部族の栄光、功績を建物にたとえたもの。

10) この一行は 22 行の次に置くのが順当と思われる。

- 明瞭な話し手（アラブ）も、不明瞭な話し手（非アラブ）も散りぢりに投げ出される。
- 22- 彼らはあらゆる地で部族を支え、その弁士は人々を沈黙させる。
- 23- 我らの弁士は立って、とうとうと語るが、（敵方）弁士は心痛ゆえか、舌足らずで、言うべきことも忘れさせられる。
- 24- 我ら是一群の星である。一つの星が沈むと、埃に遮られない次の輝かしい星が現れる。
- 25- ライオンのように猛々しい悪が天を暗くするとき、我らの星群のなかから、輝く星が現れ、他の星がその周りに集まる。
- 26- 私に情報を求める者よ、お前が我らが戦う日について尋ねたのは、ただ、それを知りたかっただけのこと。
- 27- 我らが結んだ契約はいかなる者も解くことが出来ない。しかし、我らはどのような固い彼らとの契約でも破棄する。
- 28- フサインは彼の娘たちにヒジャーズで（自慢の）歌を聞かせているが、誇るどころか自らをあざけるのみだ。
- 29- だが、我らは雄ヤギの凶暴さを同等の反撃で癒す。我らは雄ヤギの尻を血で濡らすまで打ち付ける¹¹⁾。

11) 族長を雄ヤギとする例は良く見られるが、中傷、軽蔑の意味が込められている。

—— (92) アッサファーフ・ブヌ・ブカイル・

ブヌ・マアダーン・アルヤルブーイー ——

السَّفَّاحُ بْنُ بُكَيْرٍ بْنُ مَعْدَانَ الْيَرْبُوعِيِّ

まえがき

この詩人の血筋は不明で、名前も表記以上のことは分らない。

この詩は二種が伝えられている。翻訳に当たっては、カイロ版に従い、92-1 および 92-2 に分けて訳したが、両者には、同じか、類似の行が見られる。

これはサアラバ・ブヌ・ヤルブーウの族長ヤフヤー・ブヌ・シャッダード (Yahyā b. Shaddād) に捧げた哀悼詩である。ヤフヤーはカリフ、アブド・アッラー・ブヌ・アッズバイルによってイラクの総督に任命されたカリフの兄弟ムスアブ (Muṣʿab) の部下であった。

アッズバイルは AD 683-692年のあいだカリフと称していた。

彼の兄弟ムスアブは最強の武人として名をはせていた。当時、ダマスクスによるウマイヤ朝のカリフにはマルワーン家のアブド・アルマリクがついていたが、彼が最初に直面したのは、イラクにおけるウマイヤ政権の権力の再構築であった。

他方、ムスアブはアリー党を率いるムフタルの反抗に手を焼きながらろうじてこれに勝ったが、自軍の弱体化は避けられなかった。加えて、ハーリジュ派の反抗にも悩まされていた。

アブド・アルマリクは6年以上かけてシリアの敵を押さえて権力を固めると、いよいよ、ムスアブ討伐に乗り出し、バグダードからそう遠くないカトリックの修道院 (Dayr al-Jāthaliq) を拠点とした。ここで、アブド・アルマリクは数か月軍事行動を控え、ムスアブの追従者らの離間工作を秘密裏に進め成功した。ムスアブ側の最強軍団は、アルムハッラブ (al-Muhallab) という司令官に率いられてハーリジュ派と対決するため遠くバスラにいた。ムスアブは主としてクーファを拠点としてここで徴募した兵とタミーム族を手元においていた。

アブド・アルマリクは自軍の体制を十分に整えた上で、ムスアブを攻撃した。ムスアブは主力であるタミーム族がアッターブ・ブヌ・ワルカー (ʿAttāb b. Warqā) に率いられて逃亡し、わずかの手勢で攻撃に耐えなければならなくなった。彼に最後まで従った手勢の中にこの詩で悼まれているヤフヤーが含まれており、ムスアブとともに691年に処刑された。これを境にアブド・アルマリクはイラクに支配権を確立し、翌年、メッカを長期包囲したアルハッジージュによってアッズバイルは打倒され、ダマスクスのカリフへの反抗運動に終止符がうたれた。

この詩は以上のような歴史的事件を背景にしてムスアブ処刑の直後に詠まれたものである。この詩はイスラーム精神によく染まった内容を持ち、これが希薄な本詩集のイスラーム初期の詩と趣が少し異なる。サリーウ調、(No. 92-1) 13行。

(92-1) テキスト

وَقَالَ السَّقَّاحُ بْنُ بُكَيْرٍ بْنُ مَعْدَانَ الْيَرْبُوعِيُّ

- 1- صَلَّى عَلَى يَحْيَى وَأَشْيَاعِهِ رَبُّ عَفُورٌ وَشَفِيعٌ مُطَاعٌ
 2- أُمُّ عَبْدِ اللَّهِ مَلْهُوفَةٌ مَا نَوْمُهَا بَعْدَكَ إِلَّا رُوعٌ
 3- كَمَا اسْتَحَنَّتْ بَكْرَةَ وَالِةٌ حَنَّتْ حَنِينًا وَدَعَاَهَا الزَّيْعُ
 4- يَا فَارِسًا مَا أَنْتَ مِنْ فَارِسٍ مُوطَأُ الْبَيْتِ رَحِيبُ الدَّرَاعِ
 5- قَوْلَ مَعْرُوفٍ وَفَعَالُهُ عَقَّارٌ مَثْنَى أُمَّهَاتِ الرِّبَاعِ
 6- يَجْمَعُ حِلْمًا وَأَنَاةً مَعًا ثَمَّتْ يَنْبَاعُ انْبِيَاعِ الشُّجَاعِ
 7- يَعْدُو فَلَا تُكَذِّبُ شِدَّاتُهُ كَمَا عَدَا الذِّئْبُ بِوَادِي السِّبَاعِ
 8- وَالْمَالِيُّ الشَّيْزِيُّ لِأَضْيَافِهِ كَأَنَّهَا أَعْضَادُ حَوْضٍ بِقَاعِ
 9- لَا يَخْرُجُ الْأَضْيَافُ مِنْ بَيْتِهِ إِلَّا وَهُمْ مِنْهُ رَوَاءُ شِبَاعِ
 10- وَفَارِسٍ بَاغٍ عَلَى قَارِحٍ ذِي مَيْعَةٍ بِالرُّمَحِ صُلْبِ الْوِقَاعِ
 11- نَهْنَهَتْهُ عَنْكَ فَلَمْ يَنْهَهُ بِالسَّيْفِ إِلَّا جَلَدَاتٍ وَجَاعِ
 12- مَنْ يَكُ لَا سَاءَ فَقَدْ سَاءَ بِي تَرَكُ أُبَيْنِيكَ إِلَى غَيْرِ رَاعِ
 13- قَوْمٌ قَضَى اللَّهُ لَهُمْ أَنْ دُعُوا وَرَدُّ أَمْرِ اللَّهِ لَا يُسْتَطَاعُ

(92-1) 訳

- よく許したまう主とよく聞き入れられるとりなし手が、ヤフヤーと彼の郎党を祝福したまへ¹⁾。
- ウバイド・アッラーの母は悲嘆にくれ²⁾、君なき後の彼女の眠りは恐怖にほかならない。
- 若い雌ラクダが（母ラクダに）あこがれるように、彼女は（夫に）あこがれ、慕情が彼女に呼びかけた。
- おお、騎士よ、君はいかなる騎士か。君の住まいは群がり寄る客に踏みつけられ、君の腕は惜しげもなく与えた。
- 君は善行を口にすれば、必ずこれを行い、春、生む貴重なラクダを次々と屠り、人々に振舞った³⁾。
- 彼は寛容さと沈着さを併せ持ち、加えて、とぐろを解いて突進する毒蛇のような攻撃力を兼ね備えている。
- 彼は強襲するという言葉にたがわず強襲する。その姿は野獣がすむ溪谷でオオカミが獲物に向かって突進するかのようである。

1) 既に、この頃、ムハンマドが神のとりなし手、とされているのは注目される。また *ṣallā ʿalā*（祝福する）の後に預言者およびその家族以外の者の名がおかれているのは珍しい例である。

2) ウバイド・アッラー（ʿUbayd ʿAllāh）の母とは、処刑されたヤフヤーの妻の事。

3) ヤフヤーの気前の良さをほめている。

- 8- 彼は胡桃の木で作った大きな椀に食べ物を盛って客に振舞った。それは平地に置かれた水槽の側面を思わすほどの大きな器であった。
- 9- 客たちは喉を十分うるおし、満腹してから、はじめて彼のテントから外に出た。
- 10- 活発な六才馬にまたがり、強烈に繰り出す槍をもつ傲然とした騎士が多くいたが、
- 11- 君はそのような勇者に立ち向かって追い返し、剣で痛烈な打撃を加えずには置かなかった。
- 12- 一体、誰が心を痛めないのでしょうか。君の幼子らが牧夫でもない者にゆだねられ、私の心を痛める。
- 13- 神が人々を死へと呼び出されるように定めたもうた。神の命令を押し返すことはかなわない⁴⁾。

(92-2) テキスト (アフマド・ブヌ・ウバイド ʿAḥmad b. ʿUbayd による)

وَقَالَ أَحْمَدُ بْنُ عُبَيْدٍ: وَأَنْشَدَنَا هَا أَبُو عَبْدِ اللَّهِ مَرَّةً أُخْرَى

- | | |
|---|--|
| ١- صَلَّى عَلَى يَحْيَى وَأَشْيَاعِهِ | رَبِّ رَحِيمٍ وَشَفِيعٍ مُطَاعٍ |
| ٢- لَمَّا جَلَا الْخُلَانُ عَنْ مُصْعَبٍ | أَدَّى إِلَيْهِ الْقَرْضَ صَاعًا بِصَاعٍ |
| ٣- يَا سَيِّدًا مَا أَنْتَ مِنْ سَيِّدٍ | مُوطًا الْبَيْتِ رَحِيبٍ الدَّرَاعِ |
| ٤- قَوَالٍ مَعْرُوفٍ وَفَعَالِهِ | وَهَابٍ مَثْنَى أُمَمَاتِ الرِّبَاعِ |
| ٥- يَغْدُو بِهِ فِي الْحَرْبِ ذُو مِيعَةٍ | فُؤَيْخٍ مُجْتَمِعٍ أَوْ رَبَاعٍ |
| ٦- ذَاوَيْتَهُ الْفِطْطَةَ حَتَّى شَتَا | كَأَنَّ مَتْنِيهِ أَدِيمًا صَنَاعٍ |
| ٧- مَنْ يَلُكُ لَا سَاءَ فَقَدْ سَاءَ بِي | تَرَكُ أَبْيْنِيكَ إِلَى غَيْرِ رَاعٍ |
| ٨- إِلَى أَبِي طَلْحَةَ أَوْ وَقَدٍ | وَقَدْ عَلِمْنَا أَنَّ ذَاكَ الضِّيَاعِ |
| ٩- أُمُّ عَبْدٍ اللَّهِ مَلْهُوفَةٌ | مَا نَوْمُهَا بَعْدَكَ إِلَّا رُوعٍ |
| ١٠- كَمَا اسْتَحَنَّتْ بَكْرَةً وَالْهَـ | حَنَّتْ حَنِينًا وَدَعَاَهَا النِّزَاعِ |
| ١١- تِلْكَ سَرَايَاهُ وَأَمْوَالُهُ | بَيْنَ مَوَارِيثَ بِكْسَرٍ ثُبَاعِ |
| ١٢- لَا يَخْرُجُ الْأَضْيَافُ مِنْ بَيْتِهِ | إِلَّا وَهُمْ مِنْهُ رِوَاءُ شِبَاعِ |

(92-2) 訳

- 1- 慈悲深き神とよく聞き入れられるとりなし手が、ヤフヤーと彼の郎党を祝福したまえ。
- 2- ムスアブの仲間が離反したとき、ヤフヤーはムスアブに、サーウにはサーウで¹⁾、すなわち、完全に恩を返した。

4) この一行は一行目の次に配置されるべきもの。

1) サーウ (ṣāʿ) は穀物の計量単位。

- 3- おお、首領よ、君はいかなる首領か。君の住まいは群がり寄る客で踏みつけられ、君の腕は惜しげもなく与えた。
- 4- 君は善行を口にすれば、必ずこれを行い、春、生むラクダを次々に屠り、人々に振舞った。
- 5- 彼を乗せて活発で頑強な六歳馬か五歳馬が戦争に駆け込む²⁾。
- 6- 君はその馬をナフサで治療した。やがて、冬になると馬の背の両側は、巧みな職人が磨いた皮のように光沢に包まれる。
- 7- 一体、誰が心を痛めないのでしょうか。君の幼子二人が牧夫でもない者にゆだねられ、私の心を痛める³⁾。
- 8- すなわち、アブー・タルハまたはワーキドに二人の幼子をゆだねるとのことだが⁴⁾、我らの知るところでは、それは、二人の破滅につながる。
- 9- ウバイド・アッラーの母は悲嘆にくれ、君なき後の彼女の眠りは恐怖にほかならない（92-1, 2行目に同じ）。
- 10- 若い雌ラクダが（母ラクダに）あこがれるように、彼女は（夫に）あこがれ、慕情が彼女に呼びかけた（92-1, 3行目に同じ）。
- 11- このように、相続財産に含まれる彼の妻女やラクダなどは莫大な損失をうけて売り払われた。
- 12- 客たちは喉を十分うるおし、満腹してから、はじめて彼のテントから外に出た（92-1, 9行目に同じ）。

2) この馬は、ここではヤフヤーの馬となっているが、92-1, 10行では敵の馬。

3) 〔校正者注：「幼子」の形式を除けば 92-1, 12行目に同じ。幼子は一般に *bunayy* であるが、この詩では珍しい *ubayn* が使われ、その双数形（92-2, 7行）と規則複数形（92-1, 12行）が用いられている。Lane の辞書 p. 263a を参照。〕

4) ここで言われている両名はムスアブの兄弟と解説にあるが、彼にこのような名前の兄弟は見当たらない。

—— (93) ダムラ・ブヌ・ダムラ・ブヌ・ジャービル (Ḍamra b. Ḍamra b. Jābir) ——

ضَمْرَةُ بْنُ ضَمْرَةَ النَّهْشَلِيِّ

まえがき

本名ダムラ・ブヌ・ダムラ・ブヌ・ジャービル (Ḍamra b. Ḍamra b. Jābir)。この詩人の元の名はシク (Shiqq)。イブン・クタイバはシッカ (Shiqqa) としている。意味は片割れ。

彼は背が低く、醜悪この上ない男であった。ある日、アルヒーラの宮殿をたずねると、王がこれを揶揄して“そちを見るよりもムアッドの餓鬼の話を聞く方がましだ”と言った。すると彼は、

ʿinna r-rijāla lā tūzanu bi-mīzānin, ʿinnamā l-marʿu bi-ʿaṣgharayhi, bi-ʿaqlihi wa-lisānihi
“男の値打ちは秤では測れません。人の値打ちは最も小さいものの二つによっております。すなわち、心と舌です。”

云々と答えた。王は感心して、“そちはダムラの子ダムラだろう。そちは父とそっくりだ”と言った。それ以来、Shiqq は Ḍamra b. Ḍamra と呼ばれるようになった(『詩と詩人たち』 p. 405)。

この王はアンヌアマーン・ブヌ・アルムンジルだとイブン・クタイバは述べているが、アルムファッダルはアルムンジル・ブヌ・マーイ・アッサマーウ (554 没) としており、これが妥当なようである。

この伝説の王の言葉は父の片割れ、父そっくりというのを、言葉遊びでシクと言ったものかも知れない。アラブは父と同じ名前を付ける習慣が無かったようであるが、後で生まれるほどつける名前が少なくなって、やむをえず父の名を子につけることもあったようである。

詩人が属したナフシャル (Nahshal) はタミーム系のダーリム (Dārim) 族の有力な一家を成していた。本詩集 No. 44 の詩人、アルアスワド・ブヌ・ヤアフルも同家に属していた。

ダムラは戦士兼詩人として知られ、また、有能な ḥakam (裁定者) でもあった。タミーム系の部族間の多様な紛争の裁定を彼に委ねたが、『アルハマーサ詩集』p. 237 脚注では、彼はジャーヒリーヤ時代において最初に賄賂を受け取った裁定者であったという、アッタブリージーの所伝が紹介されている。

彼は戦士としては、アーミル・ブヌ・サアサア族とのズー・ナジャブ (Dhū Najab) での戦いに参戦している。この戦いはシウブ・ジャバラ (Shiʿb Jabala) の戦いの翌年、AD 571 年に行われた。また、彼はナジュラーンでのバヌー・アルハーリサ・ブヌ・カアブ (Banū al-Ḥāritha b. Kaʿb) との戦いに加わり、アルウザイル (al-ʿUzayyil) およびアルハーリスの子3人 (アムル、ヤジード、マリク) を殺している (No. 30 参照)。

彼の名はアムル・ブヌ・ヒンド王 (在位 554-570) が王子アスアド殺害の咎でタ

ミームに恐るべき復讐をした伝説の中にも登場する。殺されたのはアスアドではなく王の兄弟マリクだとする説もある。殺したのはスワイド・ブヌ・ダーリム (Suwayd b. Dārim) という男であった。王は詩人一族の男100人を焼き殺すと誓った。王の遠征を知った一族は逃げたが、98名が捕らえられた。王は大きな穴を掘って一族の男たちを投げ込み焼き殺した。ラクダに乗ったある旅人が遠くからこの火を見て宴会かと思いやって来ると、捉えられて尋問を受けた。何者かと尋ねられ、バラージム (Barājim) と答えた。バラージムはタミームの遠い血縁につながるものだった。王は、“まことに哀れなやつよ、バラージムの客よ”と言って、火の中に投ずるように命じた。次に、赤毛の婦人が捕らえられてきた。彼女はダムラ・ブヌ・ダムラの姉妹でハウザ・ブヌ・ジャルワル (Hawdhā b. Jarwal) の妻であると言うと、焼き殺されたとのことである。

これはよくある作為的な物語であろうが、詩人が活躍したのは6世紀後半であったことを推測させるものである。彼の孫に当たるナフシャル・ブヌ・ハッリー (Nahshal b. Harriy) も詩人として知られている。

この詩は、始終詩人の武勇と部族の栄光を自慢したものである。タウィール調、15行。

(93) テキスト

وَقَالَ ضَمْرَةُ بْنُ ضَمْرَةَ النَّهْشَلِيِّ

- ١- وَمُشْعَلَةُ كَالطَّيْرِ نَهْنَهْتُ وَرَدَهَا
 - ٢- عَلَيْهَا الْكُمَاةُ وَالْحَدِيدُ فَمِنْهُمْ
 - ٣- شَمَاطِيطُ تَهْوِي لِلَسَّوَامِ كَأَنَّهَا
 - ٤- أَذِيقُ الصَّدِيقَ رَأْفَتِي وَإِحَاطَتِي
 - ٥- وَذِي تِرَةٍ أَوْجَعْتُهُ وَسَبَقْتُهُ
 - ٦- يَرَانِي إِذَا لَاقَيْتُهُ ذَا مَهَابَةٍ
 - ٧- وَقَدْ عَلِمَ الْأَقْوَامُ أَنَّ أُرُومَتِي
 - ٨- وَقِرْنَ تَرَكْتُ الطَّيْرَ تَحْجُلُ حَوْلَهُ
 - ٩- حَشَاهُ السِّنَانُ ثُمَّ خَرَّ لِأَنْفِهِ
 - ١٠- وَطَارِقُ لَيْلٍ كُنْتُ حَمَّ مَبِيتِهِ
 - ١١- وَقُلْتُ لَهُ: أَهْلًا وَسَهْلًا وَمَرْحَبًا
 - ١٢- وَمَا أَنَا بِالسَّاعِي لِیُحَرِّزَ نَفْسَهُ
 - ١٣- وَإِنْ يَكُ مَجْدٌ فِي تَمِيمٍ فَإِنَّهُ
- إِذَا مَا الْجَبَانُ يَدَّعِي وَهُوَ عَانِدُ
مَصِيدُ لِأَطْرَافِ الْعَوَالِي وَصَائِدُ
إِذَا هَبَطْتُ غُوطًا كِلَابٌ طَوَارِدُ
وَقَدْ يَشْتَكِي مِنِّي الْعُدَاةُ الْأَبَاعِدُ
فَقَصَّرَ عَنِّي سَعْيُهُ وَهُوَ جَاهِدُ
وَيَقْصُرُ عَنِّي الطَّرْفَ وَالْوَجْهَ كَامِدُ
يَفَاعُ إِذَا عَدَّ الرُّوَابِي الْمَوَاجِدُ
عَلَيْهِ نَجِيعٌ مِنْ دَمِ الْجَوْفِ جَاسِدُ
كَمَا قَطَرَ الْكَعْبُ الْمُؤَرَّبُ نَاهِدُ
إِذَا قَلَ فِي الْحَيِّ الْجَمِيعِ الرُّوَافِدُ
وَأَكْرَمْتُهُ حَتَّى عَدَا وَهُوَ حَامِدُ
وَلَكِنِّي عَنْ عَوْرَةِ الْحَيِّ ذَائِدُ
نَمَانِي الْيَفَاعُ نَهْشَلُ وَعُطَارِدُ

١٤- وَمَا جَمَعَا مِنْ آلِ سَعْدٍ وَمَالِكٍ وَبَعْضُ زِنَادِ الْقَوْمِ غَلَتْ وَكَاسِدُ
١٥- وَمَنْ يَتَبَلَّغُ بِالْحَدِيثِ فَإِنَّهُ عَلَى كُلِّ قَوْلٍ قِيلَ رَاعِ وَشَاهِدُ

(93) 訳

- 1- 鳥の群れが散開しているように、散開した軍団がなんと多いことよ。臆病者は血筋を言い立てながら、戦鬪を避けるが、私は敵軍に立ち向かった¹⁾。
- 2- 馬上の勇士は鉄で身を固めていたが、一部は槍先で狩りとられ、他の者は狩を続けた。
- 3- 軍団は小集団に分かれて、(戦利品にと) 牧草を食べているラクダに突進した。広大な低地に下った彼らはまるで猟犬のようであった²⁾。
- 4- 私は味方には同情心と万全の警戒心を馳走したが、はるかかなたの敵は私ゆえに苦痛を感じると訴えることだろう。
- 5- 私は多くの復讐者に痛撃を加えた。私は彼らの追撃を振り切った。彼らは全力で追って来たが、私に追いつくことはかなわなかった。
- 6- 復讐心がかりに私に出会うと、私の威厳に恐れをなし、目を背け、顔面蒼白となるだろう。
- 7- 栄光ある丘が数え上げられるときには³⁾、人々は私の祖先が高くそびえていることをよく承知していたからである。
- 8- 私は多くの敵の勇者を倒し、カラスがその死体のまわりを片足で飛び回るままにしておいた。死体には体内から出た血がこびりついていて。
- 9- 槍の穂先が彼の腹を突き刺し、彼は鼻を下にして伏した。ちょうど、背が伸びた少年が縁のとがった足首の骨を投げたようであった⁴⁾。
- 10- 部族全体のなかに、救い手が少ないときでも、私のテントに泊めて欲しい夜訪ねてくる客は何と多かったことだろう。
- 11- 私はこのような客に“ようこそ、お気軽に、くつろがれよ”と声をかけ歓待したものだ。客は翌朝、私をたたえて、出立した。
- 12- 私は自信を守るために努める男ではない。ひとえに、部族の名誉を守るために意を配っているのである。
- 13- もし、タミーム族に栄光と言うものがあるとすれば、それはナフシャルと高遠なウターリド(という祖先)が私を高々と上げたことである⁵⁾。
- 14- 加えて、サアドとマーリク両家は同じ血統を持ち合わせ(私を高め)た。もっとも、部族の一部の火打石は発火せず⁶⁾、値打ちがなかったが。

1) 戦鬪にあたって名家ぶりを大声で名乗るのが慣わしであったが、臆病者は名乗りながら、逆に戦鬪を避けて逃げる、と言っている。

2) 戦鬪を狩にたとえ、倒されたり、倒したりすると、言ったもの。

3) rawābin「丘」(単数、rābiya) には、傑出した人物の意味もある。

4) 「腹を刺し」とあるが、前に倒れているところから見て、相手を背後から突き刺したのであろう。羊の足首の骨はサイコロとして子供にもて遊ばれていた。

5) ウターリド(=Uṭārid) は水星のことであるが、ここでは詩人の母方の遠祖にあたることウターリド・ブヌ・アウフ(=Uṭārid b. ʿAwf) をさす。彼は、サアド・ブヌ・ザイド・マナート(Saʿd b. Zayd Manāt) の血筋につながる者。

6) 「一部の火打石は発火せず」とは、「一部には血統があやしげな者がいる」の意味。サアドとは、

- 15- 最近、名誉ありと話題にされる者は誰でも、私が述べたように（私の名誉は由緒があると）敬意を表し、証言するであろう。

13行注5)のサアド・ブヌ・ザイド・マナートのことで、タミームの族長であった。マーリクとは、マーリク・ブヌ・ザイド・マナート (Mālik b. Zayd Manāt) のことで Saʿd の兄弟にあたり、ダーリム (Dārim) の祖先。

— (94) アウフ・ブヌ・アティーヤ・アルハリウ —

عَوْفُ بْنُ عَطِيَّةَ بْنِ الْحَرِجِ

まえがき

本名アウフ・ブヌ・アティーヤ・ブヌ・アムル (ʿAwf b. ʿAṭīya b. ʿAmr)。この詩人はアッリバーブ連合に属するタイム族の族長であった (No. 30 まえがき参照)。彼はシウブ・ジャバラの戦い (570年) の一年または二年前にあったラフラハーンの戦いで部族を率いて参戦しており、また、アッリバーブとアサド連合軍がアンニサールの戦いでアーミル・ブヌ・サアサア軍を撃破した戦いにも参戦しており、加えて、本詩集 No. 96 および No. 105 の内容などから考えて、6世紀後半に活躍した戦士兼詩人であったろう。

彼の部族はアルカーシムの周辺を本拠とし、アルブーウおよびタミーム系のダーリムなどと接していたと考えられる。

この詩人の作品は、No. 105 および No. 124 にも載せられている。また、本詩では、朝の略奪行が生き生きと描かれている。カーミル調、7行。

(94) テキスト

وَقَالَ عَوْفُ بْنُ عَطِيَّةَ بْنِ الْحَرِجِ التَّيْمِيُّ مِنْ تَيْمِ الرِّبَابِ

- | | |
|---|---|
| وَأِذَا النِّسَاءُ حَوَاسِرُ كَالْعُنُقْرِ | ١- وَلِنَعْمَ فِتْيَانُ الصَّبَاحِ لَقِيْتُمْ |
| تَسْعَى وَمِنْطَقُهَا مَكَانَ الْمِئْزَرِ | ٢- مِنْ بَيْنِ وَاضِعَةِ الْخِمَارِ وَأُخْتِهَا |
| كَرَّ الْمُحَلَّ عَنْ خِلَاطِ الْمَصْدَرِ | ٣- وَنَكَرُ أَوْلَاهُمْ عَلَى أَخْرَاهُمْ |
| فِي الرُّمَحِ يَعْثُرُ فِي النَّجِيعِ الْأَخْمَرِ | ٤- فَهُمْ ثَلَاثَةُ أَفْرَاءَ: فَسَابِخُ |
| إِنْ كَانَ صَاحِبَ هَجْمَةٍ أَوْ أَيْصَرِ | ٥- وَمُكَبَّلُ يُفْدَى بِوَافِرِ مَالِهِ |
| إِنْ كَانَ شَاكِرَهَا وَإِنْ لَمْ يَشْكُرِ | ٦- أَوْ بَيْنَ مَمْنُونٍ عَلَيْهِ وَقَوْمِهِ |
| حَذَرَ الصَّبَاحِ وَنَحْنُ بِالْمُسْتَمْطَرِ | ٧- وَنَحْلُ أَحْيَاءَ وَرَاءَ بُيُوتِنَا |

(94) 訳

- 1- 朝、君たちは（略奪戦を敢行した）戦士らに出会ったが、なんと素敵な若者たちであらうか。（捕らえられた）女たちは着衣もつけず、まるで、葦の根のように白かった¹⁾。

1) 早朝、略奪が突然行われ、女たちは着物をきる余裕もなくあわてて逃げようとしたが、捕えられた。もともと、日にさらされない生活をしている女は肌が白い。アルウンクル (al-ʿunkur) は葦やパピルスなどの白い根を表す。

- 2- (彼女らは恐れおののき) ヴェールを下した者もおれば、腰紐がゆるみ腰巻の位置まで下げたまま、走る姉妹もいた²⁾。
- 3- 我らは彼らの先頭の者を最後尾の者の方へ追い返したが、それはまるで、水場のラクダのなかに紛れ込んだ他人のラクダを叩いて追い返すかのようであった。
- 4- 彼らは三種の群れに分けられる。(第一は) 槍で刺され、赤黒い血を流しながら(両手を広げて) よろめく者。
- 5- (第二は) 枷をはめられた捕虜で、豊富な財産でもって解放してもらい償い金を支払う者、100 頭余のラクダの持ち主ならこれが望めるが、干草を包む布一枚しか持っていない者もいる³⁾。
- 6- (第三は) 当人が感謝しているか、感謝していないかは問われずに、彼とその一族に同情が寄せられる者⁴⁾。
- 7- 朝の略奪行が行われる日には、部族の者たちは警戒した我らのテントの背後にテントを張り (保護を求め)、我らは露天で宿営する。

2) ヴェールを下した者、および、姉妹は単数となっているが、複数の意味を表す。

3) 難解なので仮訳とする。

4) 難解なので仮訳とする。

— (95) アウフ・ブヌ・アティーヤ —

عَوْفُ بْنُ عَطِيَّةَ

まえがき

詩人については No. 94 を参照。短い詩で、詩人の勇者ぶり、寛容さ、および自部族の強勢などを誇っている。ワーフィル調、7 行。

(95) テキスト

وَقَالَ عَوْفٌ أَيْضًا

- 1- لَعَمْرُكَ إِنِّي لَأَخُو حِفَاطٍ وَفِي يَوْمِ الْكَرْبَةِ غَيْرُ غُمَرٍ
 2- أَجُودُ عَلَى الْأَبَاعِدِ بِاجْتِدَاءٍ وَلَمْ أَحْرِمِ ذَوِي قُرْبَى وَإِصْرٍ
 3- وَمَا بِي، فَأَعْلَمُوهُ، مِنْ خُشُوعٍ إِلَى أَحَدٍ، وَمَا أَزْهَى بِكِبَرٍ
 4- أَلَمْ تَرَ، أَنَّنَا مِرْدَى خُرُوبٍ نَسِيلُ كَأَنَّنَا دُفَاعُ بَحْرِ
 5- وَنَلْبِسُ لِلْعَدُوِّ جُلُودَ أَسَدٍ إِذَا نَلَقَاهُمْ وَجُلُودَ ثَمَرٍ
 6- وَنَزْعَى مَا رَعَيْنَا بَيْنَ عَبَسٍ وَطَيْئَهَا وَبَيْنَ الْحَيِّ بَكْرٍ
 7- وَكُلُّهُمْ عَدُوٌّ غَيْرُ مُبْقٍ حَدِيثُ قُرْحُهُ يَسْعَى بِوَتْرِ

(95) 訳

- 1- 君の命にかけて誓って言うが、私は一族の守護者である。戦いの日においては経験のない素人戦士ではない。
- 2- 私は遠くから恩恵を求めてやってくる者に気前よく贈り物を与える。また、これを、近親者や契約を交わした者に手控えたりはしない。
- 3- 君たちは知るが良い。すなわち、私は何人に対しても卑屈にならないし、何人にたいしても居丈高に接したりはしないことを。
- 4- 君は見なかったか。すなわち、我らは不屈の戦士であり、海の怒涛のように洪水となって敵を押し流す様を¹⁾。
- 5- (わが) 戦士は敵と対決するときには、ライオンやヒョウの皮を纏う²⁾。
- 6- 我らは敵であるアブス族やその同盟者であるタイ族、さらには、バクル族の土地

1) mirdā ḥurūbin (戦いの投石) は「不屈の戦士」を表す。洪水は「大軍勢で押し寄せる」こと。
 2) 「ライオンやヒョウの皮を纏う」は、敵を脅迫する比喩的表現であろうが、実際にヒョウの皮を着た例がある。AH 6年のフダイビーヤの和議で、クライシュのなかにヒョウの皮を着た者がいた。また、バドルの戦いでも同様である。ライオンの皮を纏った例は見当たらないが、ライオンが少なかったためか。なお、ライオンやヒョウは勇敢な戦士を表すのによく用いられる。

で、平然と放牧する³⁾。

- 7- 彼らはいずれも難敵で、(我らに)復讐しようとしたが、(我らから)受けた傷はまだ新しい⁴⁾。

3) 6世紀には、ガタファーンとサアドとタイイが同盟を結び、アフラーフ (ʿahlāf) と呼ばれていた。ここで Ṭayyīʾ-hā とあるが、-hā はアブス (ʿAbs) を受ける代名詞。すなわち、アブスとタイイが同盟していたことを表す。これは、ダーフィスの戦いの結果、575-580年頃はようやく平和が訪れていたことを示唆するものであろう (No. 9, 23行、No. 103 などを参照)。

4) 未だ復讐に成功していない、従って、依然として復讐を狙っている敵地で思いのまま放牧している自部族の威勢を誇っている。

— (96) ビシュル・ブヌ・アビー・ハージム —

بِشْرُ بْنُ أَبِي خَازِمٍ

まえがき

本名ビシュル・ブヌ・アビー・ハージム・ブヌ・アムル (Bishr b. ʿAbī Khāzim b. ʿAmr)。この詩とこれに続く3篇の詩の作者ビシュルは560-600年ごろ活躍した詩人・戦士で、古来ファフル (fahḥl、種馬、すぐれた詩人) と評された重要な詩人である。彼はハーティム・アッタイイ、バナウ・ラアム・アッタイイ (Banū Laʿm al-Ṭayyī) のアウス・ブヌ・ハーリサ (ʿAws b. Hāritha)、アンナービガ・アズブヤーニー (al-Nābiḡha al-Dhubyānī) およびラフム朝最後の王アンヌアマーン・アブー・カーブース (在位580-602) らと同時代の人物である。彼はアンニサールの戦い (アルアンバーリー『注釈書』p. 363)、および、第2次アルフィジャール al-Fijār の戦い (ʿAyyām al-ʿArab, p. 326) を経験している。

前者はシウブ・ジャバラの戦い (ʿAyyām al-ʿArab, p. 349) の4-5年後、575年ごろ、後者は585年ごろの戦いである。アンニサールの戦いでは、彼の属するアサド族とダッバ族連合軍はアーミル・ブヌ・サアサア軍に大敗北を喫さしめた。

第2次アルフィジャールの戦いにおいては、彼はクライシュ族のハルブ・ブヌ・ウマイヤ (Ḥarb b. ʿUmayya) とアブド・アッラー・ブヌ・ジュドアーン (ʿAbd ʿAllāh b. Judʿān) にアルバッラード・アルキナーナ (al-Barrād al-Kināna) がウルワ・アッラッハール (ʿUrwa al-Raḥḥāl) を殺害した情報を伝えた。そこで、クライシュはハワージンがこれに気づいて攻撃してくる前にウカーズから聖域に退去することができた。

また、シウブ・ジャバラの戦いの少し前、ヒスン・ブヌ・フザイファ (Ḥisn b. Ḥudhayfa) がズブヤーーンの族長であったとき、敵対関係にあったアサドとタイイの和解協定をとりまとめている。

彼はハワージン系のワーイラ・ブヌ・サアサア族に略奪戦をしかけたとき、ある少年が放った矢による傷がもとで死ぬことになるが、矢傷を受けたあとも長く生き、その間に自身の挽歌を詠んだとのことである。

この詩はタウィール調、22行。1-7行は愛の序詞、8行以下はアンニサールの戦いに関するもの。

(96) テキスト

وَقَالَ بِشْرُ بْنُ أَبِي خَازِمٍ

- ١- عَفْتُ مِنْ سُلَيْمَى رَامَةً فَكَثِيبُهَا وَشَطَّتْ بِهَا عَنْكَ النَّوَى وَشُعُوبُهَا
٢- وَغَيَّرَهَا مَا غَيَّرَ النَّاسَ قَبْلَهَا فَبَانَتْ وَحَاجَاتُ الْفُؤَادِ تُصِيبُهَا

- 3- أَلَمْ يَأْتِهَا أَنَّ الدُّمُوعَ نَطَافَةً
 4- تَحْدُرُ مَاءِ الْعَرْبِ عَنْ جُرْشِيَّةٍ
 5- بِعَرْبٍ وَمَرْبُوعٍ وَعَوْدٍ تُقِيمُهُ
 6- مُعَالِيَّةٌ لَا هَمَّ إِلَّا مُحَجَّرٌ
 7- رَأَتْنِي كَأُفْحُوصِ الْقَطَاةِ ذَوَابْتِي
 8- أَجَبْنَا بَنِي سَعْدِ بْنِ ضَبَّةٍ إِذْ دَعَوْا
 9- وَكُنَّا إِذَا قُلْنَا: هَوَازُنُ أَقْبَلِي
 10- عَطَفْنَا لَهُمْ عَطْفَ الضَّرُوسِ مِنَ الْمَلَا
 11- فَلَمَّا رَأَوْنَا بِالْبَسَارِ كَأَنَّنا
 12- فَكَانُوا كَذَاتِ الْقَدْرِ لَمْ تَدْرِ إِذْ غَلَّتْ
 13- قَطْعَنَاهُمْ فَبَالِيَمَامَةٍ فِرْقَةٌ
 14- نَقَلْنَاهُمْ نَقْلَ الْكِلَابِ جِرَاءَهَا
 15- لَحَوْ نَاهُمْ لَحْوَ الْعِصِيِّ فَأَصْبَحُوا
 16- لَدُنْ غُدُوَّةٍ حَتَّى آتَى اللَّيْلُ دُونَهُمْ
 17- جَعَلْنَ قُسَيْرًا غَايَةً يُهْتَدَى بِهَا
 18- إِذَا مَا لَحِقْنَا مِنْهُمْ بِكَتِيْبَةٍ
 19- بَنِي عَامِرٍ إِنَّا تَرَكْنَا نِسَاءَكُمْ
 20- عَضَارِيطُنَا مُسْتَبْطِنُو الْبَيْضِ كَالدُّمَى
 21- تَبَيَّتِ النِّسَاءُ الْمُرْضِعَاتُ بِرَهْوَةٍ
 22- دَعُوا مَنِيَّتِ السِّيفَيْنِ إِنَّهُمَا لَنَا
- لِعَيْنٍ يُوَاوِي فِي الْمَنَامِ حَبِيبُهَا
 عَلَى جَرَبَةٍ تَعْلُو الدِّبَارَ غُرُوبُهَا
 مَحَالَةٌ خُطَافٍ تَصِرُ تُقُوبُهَا
 وَحَرَّةٌ لَيْلَى السَّهْلُ مِنْهَا وَلُوبُهَا
 وَمَا مَسَّهَا مِنْ مُنْعَمٍ يَسْتَشِيْبُهَا
 وَلِلَّهِ مَوْلَى دَعْوَةٍ لَا يُجِيبُهَا
 إِلَى الرُّشْدِ، لَمْ يَأْتِ السَّدَادَ حَطِيبُهَا
 بِشَهْبَاءٍ لَا يَمْسِي الضَّرَاءَ رَقِيبُهَا
 نَشَاصُ الثُّرَيَّا هَيَّجَتْهَا جَنُوبُهَا
 أَتَنَزَّلُهَا مَذْمُومَةٌ أَمْ تُذَيِّبُهَا
 وَأُخْرَى بِأَوْطَاسٍ تَهْرُ كُلِّيبُهَا
 عَلَى كُلِّ مَعْلُوبٍ يَثُورُ عَكُوبُهَا
 عَلَى آلَةٍ يَشْكُو الْهُوَانَ حَرِيبُهَا
 وَأَدْرَكَ جَرِي الْمُبْقِيَاتِ لُغُوبُهَا
 كَمَا مَدَّ أَشْطَانَ الدِّلَاءِ قَلِيبُهَا
 تُذَكِّرُ مِنْهَا دَخْلُهَا وَذُنُوبُهَا
 مِنَ الشَّلِّ وَالْإِيْجَافِ تَدْمَى عُجُوبُهَا
 مُضَرَّجَةٌ بِالزَّعْفَرَانِ جُيُوبُهَا
 تَفَرَّغَ مِنْ خَوْفِ الْجَنَانِ قُلُوبُهَا
 إِذَا مُضَرُّ الْحَمْرَاءِ شَبَّتْ حُرُوبُهَا

(96) 訳

- 1- ラーマの地とその砂山は、スライマーが住んでいた痕跡を消し去った。彼女は遠くに旅立ち、お前にとり彼女は遠い人となった。
- 2- 彼女より以前に人々を変えた時のうつろいが、彼女を変えた。彼女は遠くへ行ってしまったが、私の心は彼女を求めてやまぬ。
- 3- 私が目から涙を流し続け、恋人とは夢の中でしか会えないという知らせが彼女に届いたのだろうか。
- 4- 涙はジュラシュの雌ラクダによってくみ上げられた井戸水が、種をまいた畑に注がれるように大量に流れた。すなわち、(ラクダの) 皮バケツは畑の上から水を注いだのである¹⁾。
- 5- 大きな皮バケツと、4本のより糸で作ったロープと、動くとき隙間からきしむ音を立て

1) ジュラシュ (Jurash) はヤマンの農業地。ここでは井戸の水を汲み上げラクダが水袋を背負って歩きながら灌漑が行われた。

- る鉄かぎのついた滑車を水平に支える軸受けでもって（ラクダを使って水をくみ上げる）²⁾。
- 6- 彼女は高い丘の道を求めた。彼女がめざすのは、ムハッジャルとライラーのハッラの地にほかならぬが、そこからは平地や火山岩が多い土地へと続いていた³⁾。
- 7- 彼女は私のこめかみに髪の毛がなく、まるで、砂ライチョウが卵を産む地面のようになめらかなのに気付いたが、それは、情けある敵が報償を求めて髪の毛を切り落としたためではない⁴⁾。
- 8- 我らはサアド・ブヌ・ダッパの子らが救援の声を上げたとき、これに応じた。しかし、呼びかけられても、応じない者がいるとはけしからぬ⁵⁾。
- 9- 我らが常に“ハワージンの衆、正道を歩め”と言うと、彼らの演説者は的のはずれたことを叫ぶ⁶⁾。
- 10- 我らは砂漠から彼らに激戦を挑み、彼らに損害を与えた。すなわち、灰色の武器をかかげた騎馬隊で戦い、斥候兵らも藪に隠れず、公然と偵察した⁷⁾。
- 11- 彼らはアンニサルでわが軍団を見たとき、（あまりの軍勢に驚き）スバル星に運ばれ、南風に吹き寄せられた高い雲の塊かと思ったであろう。
- 12- 彼は鍋に（乳脂をいれてバターを作ろうとしている）女のような。よく煮える前に鍋を火から下すべきか、— そうすれば非難される。それとも乳脂が溶けてしまうまで、火にかけておくのか、— そうすれば、バターが溶けてなくなる。この難題に直面している女のような。
- 13- 我らは彼らを二つに分断した。一群の者はアルヤマーマに、他群の者はアウトースに逃げたが、その犬どもは彼らに向かって吠えた⁸⁾。
- 14- 我らは彼らを人に踏みならされたあらゆる道へと、まるで、犬が子を運ぶように、追いやった。その道中では土ぼこりが高く舞い上がった。
- 15- 我らは、棒の皮をむくように、彼らの財産をすべて剥ぎ取った。そのため、彼らは略奪された者が惨めな境遇におかれて苦情を言うような、哀れな姿になった。
- 16- 早朝から夜になるまで我らは彼らを殺し続けた。やがて、走力を残していた我らの軍馬も疲労してきた。

2) ʿawd をアルムファッダルは「年老いたラクダ」と解説しているが、アットゥーシー (al-Ṭūsī) は「軸受け棒」としており、これによった。

3) ムハッジャル (Muḥajjar) またはムハッジル (Muḥajjir)。ラビードのムアッラカ18行にもこの地名がある。ハッラ (ḥarra) は火山岩帯で、ライラー (Laylā) はズブヤーン系のムッラ族の土地でメディナの近くにある。

4) 有力者を捕らえると前髪を切り、加えて、矢筒の矢を奪い、誇らかに勝利を叫ぶ。これは身代金をふやすことにつながる。詩人は捕虜になって前髪を切られたためではなく、ヘルメットで髪が擦り切れたことを暗示している。dhuʿāba は額の左右に垂れている髪の毛、ʿuḥūs は砂ライチョウが産卵のために掘った穴のことであるが、ここでは平坦な地表になぞらえている。

5) lillāhi 「神ゆえに」は多くの場合ほめ言葉として用いられるが、ここでは、非難を表す。

6) khaṭīb は戦闘に先立つ宣伝演説をする者のことで、戦闘の前に、言葉のやり取りがあったことを示す。

7) al-qārūs は「咬み癖のある性悪なラクダ」であるが、ここでは激戦の意味。見方は伏兵とならず公然と進撃した、との意味。

8) アーミル・ブヌ・サアサアの軍勢は中央を突破され、左右がそれぞれ反対方向に逃げた。すなわち、一方は東の山岳地アルヤマーマに、他方は、ヒジャーズ周辺の西アウトース (ʿAwṭās) に向かった。

- 17- 我ら（アサド族）の騎馬隊が迷わず標的にしたのは、ひとえに、クシャイルであった⁹⁾。ちょうど井戸の汲み上げバケツの綱が真っ直ぐに伸びているように（彼を指して直進した）。
- 18- 彼らの騎馬隊に追いつくと、彼らへの遺恨と我らに加えた不幸な日が思い出され（我らは激しく攻め立てた）。
- 19- アーミル族の者ども、我らはお前たちの女が捕らえられ、追い立てられ、急ぎ搬送され、臀部から血が流れるままにしておいたぞ¹⁰⁾。
- 20- 我らの従者は（敵から奪った）肌の白い女が胸元をサフランで染めているのを見て彫像のように美しいと思った。
- 21- 乳を飲ませる女たちは窪地で夜を過ごす¹¹⁾、暗夜に隠れていることが露見しないかと、心は不安に駆られていた。
- 22- アッシーファーンの牧草地は、赤いムダル¹²⁾の戦いが燃え上がる時には、我らのものの、手出し無用である¹²⁾。

9) クシャイル (Qushayr) はアーミル・ブヌ・サアサアの有力な支族で、ウカイル (ʿUqayl) の兄弟支族。彼らはハニーファ系のバクルおよびカイス・ブヌ・サアラバの隣接地域に住んでいた。

10) 捕らえられた女は馬かラクダで後方に送られるが、鞍も敷物もつけていないので、尾てい骨周辺から血が流れる。

11) rahwa は「くぼんだ低地」と「盛り上がった丘」の両義があるが、ここでは低地。

12) al-sīfayni は al-sīqayni とする説もある。前者は両海岸の意味である、アサドおよびハワージンが海岸より遠く離れたところに住んでいたことから見て、後者の読みが妥当かもしれない。すなわち、al-sīqayni は「二つの溪谷（または山）」を表すからである。Muḍar l-ḥamrā (赤いムダル)、と言われるゆえんは諸説あるが決め手はない。1) 父がムダルに（赤い）皮製のテントを与えた、2) 遺産相続で彼が赤い金貨を受け取った、3) 彼の軍勢は赤いターバンを着用し、アルヤマン勢は黄色いそれを着用していた、などの説がある。

— (97) ビシュル・ブヌ・アビー・ハージム —

بِشْرُ بِنِ أَبِي حَازِمٍ

まえがき

詩人については No. 96 「まえがき」参照。この詩では最初に幻について語り、かつての恋人が旅立ち関係が断たれたが、彼女への思いは年老いるまで断たれなかった、としている。次いで、青春の思い出、恋人を描写し、人気のない砂漠を雌ラクダに乗って横断したこと、その雌ラクダの駿足ぶりは野生の雄牛のようであった、と語っている。

詩人がバヌー・サアドに和解を呼びかけたが、従わないので豊かな牧草地での放牧を禁じたこと、自部族の騎馬隊が多いことなどに言及し、加えて、馬の描写に及んでいる。

最後にアサド族に横柄であったかどで Judhām 族をシリアに追い出したと述べている。ワーフィル調、38行。

(97) テキスト

وَقَالَ بِشْرٌ أَيْضًا

- | | |
|--|--|
| أَمْ الْأَهْوَالُ إِذْ صَحِي نِيَامُ | ١- أَحَقُّ مَا رَأَيْتُ أَمْ اخْتِلَامُ |
| وَكُلُّ وَصَالٍ غَانِيَةٍ رِمَامُ | ٢- أَلَا ظَعَنْتَ لِنَيْتِهَا إِدَامُ |
| كَبِرْتَ وَقِيلَ إِنَّكَ مُسْتَهَامُ | ٣- جَدَدْتُ بِحُبِّهَا وَهَزَلْتُ حَتَّى |
| بِهَا، وَالذَّهْرُ لَيْسَ لَهُ دَوَامُ | ٤- وَقَدْ تَغْنَى بِنَا حِينًا وَنَغْنَى |
| كَأَنَّ رُضَابَهُ وَهَنًا مُدَامُ | ٥- لِيَالِي تَسْتَبِيكَ بِذِي غُرُوبِ |
| يُسْنُ عَلَى مَرَاغِمِهِ الْقَسَامُ | ٦- وَأَبْلَجَ مُشْرِقِ الْخُدَيْنِ فَحَمِ |
| بِصَاحَةِ فِي أَسْرَتِهَا السَّلَامُ | ٧- تَعَرَّضَ جَابَةِ الْمِدْرَى خَذُولِ |
| يَضُوعُ فُؤَادَهَا مِنْهُ بُغَامُ | ٨- وَصَاحِبُهَا غَضِيبُ الطَّرْفِ أَخْوَى |
| فِيَا فِيهِ نَحْنُ بِهَا السَّهَامُ | ٩- وَخَرِقَ تَعَزُّفُ الْجِنَانِ فِيهِ |
| إِذَا أَدْرَعْتَ لَوَامِعَهَا الْإِكَامُ | ١٠- دَعَرْتُ ظِبَاءَهَا مُتَعَوَّزَاتِ |
| بَلَعْتُ نُضَارَهَا وَفَنَى السَّنَامُ | ١١- بِذِعْلِبَةِ بَرَاهَا النَّصُّ حَتَّى |
| بِحَرْبَةٍ لَيْلَةٍ فِيهَا جَهَامُ | ١٢- كَأَخْنَسَ نَاشِطٍ بَاتَتْ عَلَيْهِ |
| تَحَلَّى عَنْ صَرِيْمَتِهِ الظَّلَامُ | ١٣- فَبَاتَ يَقُولُ: أَصْبَحَ لَيْلٌ، حَتَّى |
| نُصُولُ الدَّرِّ أَسْلَمَهُ النِّظَامُ | ١٤- فَأَصْبَحَ نَاصِلًا مِنْهَا ضَحِيًّا |

- ١٥- أَلَا أُبْلِغُ بَنِي سَعْدٍ رَسُولًا
 ١٦- نَسُومُكُمُ الرَّشَادَ وَنَحْنُ قَوْمٌ
 ١٧- فَإِذْ صَفَرْتُ عِيَابَ الْوَدِّ مِنْكُمْ
 ١٨- فَإِنَّ الْجِرْعَ جِرْعَ عُرَيْتِنَاتِ
 ١٩- سَنَمْنَعُهَا وَإِنْ كَانَتْ بِلَادًا
 ٢٠- بِهَا قَرَّتْ لَبُونُ النَّاسِ عَيْنًا
 ٢١- وَغَيْثٍ أَحْجَمَ الرُّوَادُ عَنْهُ
 ٢٢- تَعَالَى نَبْتُهُ وَاعْتَمَّ حَتَّى
 ٢٣- أَبْحَنَاهُ بِحَيٍّ ذِي جَلَالٍ
 ٢٤- وَمَا يَنْدُوهُمْ النَّادِي وَلَكِنْ
 ٢٥- وَمَا تَسْعَى رِجَالُهُمْ وَلَكِنْ
 ٢٦- فَبَاتَتْ لَيْلَةً وَأَدِيمَ يَوْمٍ
 ٢٧- فَلَمَّا أَسْهَلْتُ مِنْ ذِي صُبْحٍ
 ٢٨- أَثَرْنَ عَجَاجَةً فَخَرَجْنَ مِنْهَا
 ٢٩- بِكُلِّ قَرَارَةٍ مِنْ حَيْثُ جَالَتْ
 ٣٠- إِذَا خَرَجْتَ أَوَائِلُهُنَّ شَعْنًا
 ٣١- بِأَحْقِيهَا الْمَلَاءُ مُحْرَمَاتِ
 ٣٢- يُبَارِينَ الْأَسِنَّةَ مُصْغِيَاتِ
 ٣٣- أَلَمْ تَرَ أَنَّ طَوْلَ الدَّهْرِ يُسْلِي
 ٣٤- وَكَانُوا قَوْمًا فَبَعَوْا عَلَيْنَا
 ٣٥- وَكُنَّا دُونَهُمْ حِصْنًا حَصِينًا
 ٣٦- وَقَالُوا: لَنْ تُقِيمُوا إِنْ طَعْنَا
 ٣٧- أَثَافِي مِنْ حَزِيمَةِ رَاسِيَاتِ
 ٣٩- فَإِنَّ مَقَامَنَا نَدْعُو عَلَيْكُمْ
- وَمَوْلَاهُمْ فَقَدْ خَلَبْتُ صُرَامَ
 لِتَارِكٍ وَدَنَا فِي الْحَرْبِ ذَامَ
 وَلَمْ يَكُ بَيْنَنَا فِيهَا ذِمَامَ
 وَبُرْقَةَ عَيْنِهِمْ مِنْكُمْ حَرَامَ
 بِهَا تَرْبُو الْخَوَاصِرُ وَالسَّنَامَ
 وَحَلَّ بِهَا عَزَالِيهَا الْعَمَامَ
 بِهِ نَقْلٌ وَحَوْذَانٌ تُوَامَ
 كَأَنَّ مَنَابِتَ الْعَلَجَانِ شَامَ
 إِذَا مَا رِبَعٍ سَرُّهُمْ أَقَامُوا
 بِكُلِّ مَحَلَّةٍ مِنْهُمْ فِقَامَ
 فَضُولَ الْخَيْلِ مُلْجَمَةً صِيَامَ
 عَلَي الْمِمْهَى يُجَزُّ لَهَا الثَّغَامَ
 وَسَالَ بِهَا الْمَدَافِعُ وَالْإِكَامَ
 كَمَا خَرَجْتُ مِنَ الْعَرْضِ السِّهَامَ
 رَكِيئَةً سُنْبُكِ فِيهَا أَنْثِلَامَ
 مَجْلَحَةً، نَوَاصِيهَا قِيَامَ
 كَأَنَّ جِدَاعَهَا أَصْلًا جِلَامَ
 كَمَا يَتَفَارِطُ الثَّمَدُ الْحَمَامَ
 وَيُنْسِي مِثْلَ مَا نُسِيَتْ جُدَامَ
 فَسُقْنَاهُمْ إِلَى الْبَلَدِ الشَّامِي
 لَنَا الرَّأْسُ الْمُقَدَّمُ وَالسَّنَامَ
 فَكَانَ لَنَا وَقَدْ طَعْنُوا مُقَامَ
 لَنَا حِلُّ الْمَنَاقِبِ وَالْحَرَامَ
 بِأَبْطَحِ ذِي الْمَجَازِ لَهُ أَثَامَ

(97) 訳

- 1- 私が見たのはうつつか夢か、それとも、友らが眠っているときに訪れた恐怖か。
- 2- ああ、イダームは旅路へと去った。天性の美女との絆は、いつかはことごとく断ち切られるものだ。
- 3- 私は彼女を真剣に愛し、また戯れもした。そして、ついに年老いてしまい、人々に“君は恋のため分別を失った”と言われた。
- 4- 彼女と我らは（隣り合って暮らし）しばらくは、互いに満足していたのだが、時は待ってくれないものだ。。

- 5- 彼女は君を幾夜も、白いのこぎり歯で虜にしたが¹⁾、その唾液は夜のひと時強いブドウ酒のように酔わす。
- 6- 彼女は晴れ晴れとした顔、ふくよかな頬、優雅さが漂う鼻で（私を虜にした）。
- 7- 彼女が横を向くと、まるで、サーハの地で群れに遅れた、角が太い（若い）雌カモシカが横を向いたようであった。その谷あいにはシラームの林で覆われていた²⁾。
- 8- 雌カモシカが連れているのは、弱弱しい目が暗褐色の子カモシカで、その鳴き声は母カモシカの心を不安にした。
- 9- 多くの砂漠では、ジンが太鼓のような音をかき鳴らし³⁾、水のない土地で熱風が音をたてながら吹きすさぶ。
- 10- 私は昼寝をしている砂漠のカモシカを恐れさせたが、既に、丘はきらきら光る蜃気楼に包まれていた。
- 11- すなわち、疾駆する雌ラクダで（カモシカを恐れさせた）。ラクダには旅を強いたので、肉が削げ、背中のかぶも消えてしまった⁴⁾。
- 12- この雌ラクダは、土地から土地へと移動する野生の雄牛のようであった。ハルバの地で雄牛は雨雲が覆う一夜をぬれて過ごした⁵⁾。
- 13- 雄牛は夜通し、“夜よ、朝になれ”と叫び続けた。雄牛がいる砂地から闇が払われるようにと願ってのことである。
- 14- やがて、雄牛は早朝、そこから抜け出した。まるで、糸からはずれた真珠の玉が抜け落ちたかのように。
- 15- バヌー・サアドと彼らの従兄弟らに使者を送って伝えよ、“最後の乳が搾られた⁶⁾”と。
- 16- 我らはお前たちに分別を望む。我らは我らとの友情を反故にする者を戦いにおいて辱める民である。
- 17- お前たちの友情のいれもの、すなわち、お前たちの心が空っぽであるからには⁷⁾、もはや、我らには果たすべき義務はない。
- 18- それゆえ、ウライティナートの溪谷の斜面とアイハムの砂利が混ざった平原でお前たちが放牧することを禁じる。
- 19- これらの土地ではラクダの胴やこぶが良く太るのであるが、お前たちがここに立ち入ることは許さないであろう。

1) *ghurūb* (単数 *gharb*) 「鋸状の歯」、女性の若さを暗示している。

2) *taʿarruḍa* を絶対目的語とする動詞が省略されているものと考えられる。サーハ (*ṣāha*) はアサド族の地名。*ʿasirra* (単数 *sirār*) は「草木がよく育つ谷間の肥沃な土地」。シラーム (*silām*) は「アラビアアカシア」。

3) 風による摩擦で生じる音をジンが遠くで太鼓を叩いている音と、アラブは思っていたことを示している。

4) *baraghtu nuḍārahā* 直訳すると「私はラクダの固い骨格に達した」、つまり、ラクダの肉がそげて痩せてしまった姿を表現したもの。*fanā* はタイイ族の方言で、*faniya* 「消滅した」の意。

5) ハルバ (*ḥarba*) はヒジャーズのフザイル族の土地。野生の牛の生息地として古詩でよく取り上げられる地方である。*jahām* は雨を降らせない雲の意味であるが、ここでは、雄牛が一晩中雨に降られたことと解説されている。ラビードのムアッラカ24行では、この語が「水気のない赤味の千切れ雲」の意味で用いられている。

6) 「最後の乳が搾れた」は「戦争に訴える」の比喻。バヌー・サアド (*Banū Saʿd*) はアサド族の一派か。本詩34行参照。

7) *ʿiyābu l-wuddi* 「友情を納める皮袋」、つまり「心」をさす。

- 20- これらの土地では、人々の乳ラクダは嬉々としていた。白い雲が水袋の口を開け雨をふんだんに注いだからである。
- 21- 多くの豊かな牧草地から、これを求めてくる者たちが、恐れをなして退いて行く⁸⁾。そこにはナウファル草やハウザーン草が密集して伸びている。
- 22- 草は高く伸び繁茂しており、アルアラジャーン草が黒々と密集しているあたりは、まるで、ほくろのようである。
- 23- われらはこの草原は、多くのテントを持つ（わが）部族に放牧が許されていると見なしている。よって、（我らの）ラクダが脅されれば、踏み留ま（って守）る。
- 24- 彼らは（人数が多いため）集会所が全員を収容できず、集団ごとに各自の場所に集まる。
- 25- 彼らの男たちは徒歩で急ぐ必要はなかった。すなわち、彼らには轡をはめ、静かに出撃できる馬を潤沢に持っていたのである。
- 26- 馬はアルミムハーで一夜と翌日のひと時を過ごし、サガームの樹が餌として切り与えられた。
- 27- 馬がゾー・サバーフから平地におりてきて、谷間の水路と丘が馬と共に溢れ出ると、
- 28- 馬は土ぼこりをあげ、そこから進撃する馬の姿は、矢が標的を突き破って飛び出るようであった。
- 29- 馬が横断した平地のいたるところには、ひづめの前部の跡で地面がへこんでいた⁹⁾。
- 30- 馬の先頭集団がたて髪を振り乱して突進してきたときには、馬の前髪はそそり立っていた。
- 31- 馬の背後には鎖帷子を束ねて載せているが¹⁰⁾、連れている子馬の姿は（ほっそりとしていて）子山羊のようであった。
- 32- 馬は騎手の穂先が頬のそばに覗いているのと競争して、頭を傾けて疾走するが、その様は、鳩がわずかな水溜りへ我先にと競っているかのようだ。
- 33- 長い歳月は忘却をもたらし、何もかも忘れさせるものだ。かのジュザーム族の一件が忘れられたように¹¹⁾。
- 34- 彼らはわが部族の者であったが¹²⁾、我らに悪事を働いたので、我らは彼らをシリアに追いやった。
- 35- 我らは彼らを守る強固な砦であった。我らのもとには優れた指導者と卓越した族長が控えていた。
- 36- 彼らは“我々が立ち去ると、お前たちはここにおれなくなるぞ”と言ったが、彼ら

8) 牧草地を守っている民が恐ろしくて、外来者は敬遠して退く、の意。tu'ām「二本ずつ」が原義であるが、「たくさん生えている」の意味。

9) ひづめが長いことは自慢の種であった。この一行は脚韻が異なるだけで、同じものが No. 98, 48 行に出てくる。

10) bi-ahqīhā「馬の腰布」では意味がつかめない。bi-ahqubihā「雌馬の背後」との伝承によって訳した。戦闘には通常、雌馬を用いるが、戦闘直前に鎖かたびらを馬に運ばせる、というところに多少の疑問が残る。

11) 解説ではジザーム(Jidhām)はアサド族の一派としているが、アサドは中央および北アラビアのマアッド系の雄族であった。これにひきかえ、ジュザーム(Judhām)は南アラビアの出でラフム・ブヌ・アディー(Lakhm b. 'Adī)の兄弟部族でカフラーン・ブヌ・サバー(Kahlān b. Saba')の子孫である。彼らは、ダマスクスから南五日行程のマアーン(Ma'an)の隣バルカー(Balqā)に移住し、キリスト教徒になった。

12) 彼らとは、シリアに移ったアサド族の一派バヌー・サアド(Banū Sa'd)と思われる。

が立ち去ったあと、我らは依然としてこの地に住んでいる。

- 37- 我らはフザイマの石で作った五徳のように¹³⁾、どっしりと、不動の姿でここに住み諸道の通行の許可、禁止は我らが行っている。
- 38- 我らはズー・アルマジャーズに結集して¹⁴⁾、お前たちを呪ったが、その呪いのため、お前たちは罪をつぐなうべく罰せられるであろう。

13) フザイマ (Khuzayma) はアサドとキナーナの父祖にあたる部族。キナーナを通じてクライシュ族にもつながる。通行の許可とは、タイマーから東に通じるキャラバンルートに関するもので、メッカの神殿へのそれではないであろう。

14) ズー・アルマジャーズ (Dhū al-Majāz) ではズー・アルヒッジャ (巡礼月) の1-8 日にわたる八日市が開かれた。ズー・アルマジャーズはアラファート山の背後にあり、メッカに近い。ウカーズもこの近くにあり、こちらではズー・アルカアダ月の初めに、20日間の市が開かれた。呪いを聖なる地でかけるといえるのは、その効果が大きいと考えられていたためであろう。ヒッリザのムアッラカ41行では、長期にわたったバクルとタグリブの間で争われたバスースの戦いを、ヒーラのアルムンジル3世が調停し和解させたのも、ズー・アルマジャーズであったとしている。

— (98) ビシュル・ブヌ・アビー・ハージム —

بِشْرُ بْنُ أَبِي حَازِمٍ

まえがき

この詩の主題は hamāsa (武勇) を誇ったものであるが、序詞の部分に21行にわたり ghazal (恋の感情の表明) を詠んでいる。相手の女性の名前は挙げられていないが、詩人が属するアサド族とかつては平和裏に暮らしていたものの、やがて対立するようになり旅立った部族、アーミル・ブヌ・サアサアの支族であるウカイル族の女性とされている。

序詞の後は、詩人の部族と他部族の戦いを取り上げている。すなわち、かつて同盟関係にあったタイイ族との反目、抗争をはじめ、10余の部族との戦いに言及し、最後には自部族を賞賛することで終わっている。この詩の31-35, 45, 55の7行は、カイロ版による追加である。ワーフィル調、56 行。

(98) テキスト

وَقَالَ بِشْرُ

- ١- أَلَا بَانَ الْخَلِيطُ وَلَمْ يُزَارُوا وَقَلْبُكَ فِي الظَّعَائِنِ مُسْتَعَارُ
- ٢- تَوْمٌ بِهَا الْحِدَاةُ مِيَاهَ نَحْلٍ وَفِيهَا عَنْ أَبَانِينَ أَرْوَارُ
- ٣- أَسْأَلُ صَاحِبِي وَلَقَدْ أَرَانِي بِصِيرًا بِالظَّعَائِنِ حَيْثُ سَارُوا
- ٤- أَحَاذِرُ أَنْ تَبِينَ بَنُو عُقَيْلٍ بِجَارَتِنَا فَقَدْ حُقَّ الْحِدَارُ
- ٥- فَلَأَيَّ مَا قَصَرْتُ الطَّرْفَ عَنْهُمْ بِقَانِيَّةٍ وَقَدْ تَلَعَ النَّهَارُ
- ٦- بَلِيلٌ مَا أَتَيْنَ عَلَى أَرْوَمٍ وَشَابَةٌ عَنْ شَمَائِلِهَا تِعَارُ
- ٧- كَأَنَّ ظِبَاءَ أَسْنَمَةٍ عَلَيْهَا كَوَانِسَ قَالِصًا عَنْهَا الْمَعَارُ
- ٨- يُفْلَجْنَ الشِّفَاةَ عَنْ أَفْحَوَانٍ جَلَاهُ غِبٌّ سَارِيَّةٍ قِطَارُ
- ٩- وَفِي الْأُظْعَانِ آنِسَةٌ لَعُوبٌ تَيَمَّمْ أَهْلَهَا بِلَدًا فَسَارُوا
- ١٠- مِنَ اللَّائِي غَذِيْنَ بَغِيرِ بُؤْسٍ مَنَازِلُهَا الْقَصِيْمَةُ فَلَاوَارُ
- ١١- غَذَاهَا قَارِصٌ يَجْرِي عَلَيْهَا وَمَخْضٌ حِينَ ثُبَّتَتْ الْعِشَارُ
- ١٢- نَبِيلَةٌ مَوْضِعَ الْحِجْلَيْنِ حَوْدُ وَفِي الْكَشْحَيْنِ وَالْبَطْنِ أَضْطِمَارُ
- ١٣- ثَقَالٌ كُلَّمَا رَامَتْ قِيَامًا وَفِيهَا حِينَ تَنْدَفِعُ أَنْبِهَارُ
- ١٤- فَبِتُّ مُسَهَّدًا أَرْقَا كَأَنِّي تَمَشَّتْ فِي مَفَاصِلِي الْعُقَارُ
- ١٥- أَرَأَيْتُ فِي السَّمَاءِ بَنَاتٍ نَعَشٍ وَقَدْ دَارَتْ كَمَا عَطِفَ الصُّوَارُ

- ١٦- وَعَانَدَتِ الثُّرَيَّا بَعْدَ هَذِهِ
 ١٧- فَيَا لِلنَّاسِ لِلرَّجُلِ الْمُعْتَى
 ١٨- فَإِنْ تَكُنِ الْعُقَيْلِيَّاتُ شَطَّتْ
 ١٩- فَقَدْ كَانَتْ لَنَا وَلَهْنٌ، حَتَّى
 ٢٠- لَيَالِي لَا أَطَاوِعُ مَنْ نَهَانِي
 ٢١- فَأَعْصِي عَاذِلِي وَأُصِيبْ لَهْوًا
 ٢٢- وَلَمَّا أَنْ رَأَيْنَا النَّاسَ صَارُوا
 ٢٣- مَضَى سُلَافُنَا حَتَّى نَزَلْنَا
 ٢٤- وَشَبَّتْ طَيِّئُ الْجَبَلَيْنِ حَرْبًا
 ٢٥- يَسُدُّونَ الشَّعَابَ إِذَا رَأَوْنَا
 ٢٦- وَحَلَّى الْحَيَّ حَيَّ بَنِي سُبَيْعٍ
 ٢٧- وَخَذَلْ قَوْمَهُ عَمَرُو بَنُ عَمْرٍو
 ٢٨- يَسُومُونَ الصَّلَاحَ بِذَاتِ كَهْفٍ
 ٢٩- وَأَصْعَدَتِ الرَّبَابُ فَلَيْسَ مِنْهَا
 ٣٠- فَحَاطُونَا الْقَصَا وَلَقَدْ رَأَوْنَا
 ٣١- وَأَنْزَلَ خَوْفُنَا سَعْدًا بِأَرْضِ
 ٣٢- وَأَدْنَى عَامِرٍ حَيًّا إِلَيْنَا
 ٣٣- أَبِي لَبْنِي خُزَيْمَةَ أَنَّ فِيهِمْ
 ٣٤- هُمْ فَضَلُوا بِخَالَاتٍ كِرَامٍ
 ٣٥- فَمِنْهُمْ الْوَفَاءُ إِذَا عَقَدْنَا
 ٣٦- وَبُدِّلَتِ الْأَبَاطِحُ مِنْ نُمَيْرٍ
 ٣٧- وَلَيْسَ الْحَيُّ حَيَّ بَنِي كِلَابٍ
 ٣٨- وَقَدْ ضَمَرْتُ بِجَرَّتِهَا سُلَيْمٍ
 ٣٩- وَأَمَّا أَشْجَعُ الْخُنْنَى فَوَلَّتْ
 ٤٠- وَلَمْ نَهْلِكْ لِمَرَّةٍ إِذْ تَوَلَّوْا
 ٤١- فَأَبْلَغُ إِنْ عَرَضَتْ بِنَا رَسُولًا
 ٤٢- كَفَيْنَا مَنْ تَغَيَّبَ وَأَسْتَبَحْنَا
 ٤٣- بِكُلِّ قِيَادٍ مُسْنَفَةٍ عُنُودٍ
 ٤٤- مُهَارِشَةٍ الْعِنَانِ كَانَ فِيهَا
 ٤٥- كَأَنِّي بَيْنَ خَافِيَتِي عُقَابٍ
 ٤٦- نَسُوفٍ لِلْحِزَامِ بِمِرْفَقَيْهَا
- مُعَانَدَةً لَهَا الْعَيُوقُ جَارُ
 بِطُولِ الدَّهْرِ إِذْ طَالَ الْحِصَارُ
 بِهِنَّ وَبِالرَّهِينَاتِ الدِّيَارُ
 زَوْتَنَا الْحَرْبُ، أَيَّامُ قِصَارُ
 وَبِضْفُو فَوْقَ كَعْبِي الْإِزَارُ
 وَأُوذِي فِي الزِّيَارَةِ مَنْ يَغَارُ
 أَعَادِي لَيْسَ بَيْنَهُمْ أَتِمَارُ
 بِأَرْضٍ قَدْ تَحَامَتَهَا نِزَارُ
 تَهَرُّ لِسَجْوَهَا مِنْهَا صُحَارُ
 وَلَيْسَ يُعِيدُهُمْ مِنْهَا انْجِحَارُ
 فُرَاضِبَةٌ وَنَحْنُ لَهُمْ إِطَارُ
 كَجَادِعٍ أَنْفِهِ وَبِهِ انْصِصَارُ
 وَمَا فِيهَا لَهُمْ سَلْعٌ وَقَارُ
 بِصَارَاتٍ وَلَا بِالْحُبْسِ نَارُ
 قَرِيبًا حَيْثُ يُسْتَمَعُ السِّرَارُ
 هُنَالِكَ إِذْ تُجِيرُ وَلَا تُجَارُ
 عُقَيْلٌ بِالْمَرَانَةِ وَالْوِبَارُ
 قَدِيمُ الْمَجْدِ وَالْحَسْبُ النُّضَارُ
 مَعَدًّا حَيْثُمَا حَلُّوا وَسَارُوا
 وَأَيْسَارُ إِذَا حُبُّ الْقِتَارُ
 سَنَابِكُ يُسْتَشَارُ بِهَا الْعُبَارُ
 بِمُنْجِيهِمْ، وَإِنْ هَرَبُوا، الْفَرَارُ
 مَخَافَتَنَا كَمَا ضَمَرَ الْحِمَارُ
 ثِيُوسًا بِالشَّطِيِّ لَهُمْ يُعَارُ
 فَسَارُوا سَيْرَ هَارِيَةٍ فَعَارُوا
 كِنَانَةَ قَوْمَنَا فِي حَيْثُ صَارُوا
 سَنَامُ الْأَرْضِ إِذْ قَحِطَ الْقِطَارُ
 أَضَرَّ بِهَا الْمَسَالِحُ وَالْعَوَارُ
 جَرَادَةٌ هَبُوءَ فِيهَا اصْغِرَارُ
 ثَقْلِبُنِي إِذَا ابْتَلَّ الْعَذَارُ
 يَسُدُّ حَوَاءَ طُبَيْيَهَا الْعُبَارُ

٤٧-	تَرَاهَا مِنْ يَبِيسِ الْمَاءِ شُهْبًا	مُخَالِطَ دِرَّةٍ مِنْهَا غِرَارُ
٤٨-	بِكُلِّ قَرَارَةٍ مِنْ حَيْثُ جَالَتْ	رَكِيئَةً سُنْبُكٍ فِيهَا انْهِيَارُ
٤٩-	وَحِنْدِيدٍ تَرَى الْعُرْمُولَ مِنْهُ	كَطَيِّ الرِّقِّ عَلَقَهُ التَّجَارُ
٥٠-	كَأَنَّ حَفِيفَ مَنْحَرِهِ إِذَا مَا	كَتَمْنَ الرَّبْوَ كَبِيرُ مُسْتَعَارُ
٥١-	وَجَدْنَا فِي كِتَابِ بَنِي تَمِيمٍ:	أَحَقُّ الْخَيْلِ بِالرَّكْضِ الْمُعَارُ
٥٢-	يُضَمَّرُ بِالْأَصَائِلِ فَهُوَ نَهْدٌ	أَقْبُ مُقْلَصٌ فِيهِ اقْوِرَارُ
٥٣-	كَأَنَّ سِرَاتَهُ، وَالْخَيْلُ شُعْتُ	غَدَاةٌ وَحِفْهًا، مَسَدٌ مُعَارُ
٥٤-	يَظَلُّ يُعَارِضُ الرُّكْبَانَ يَهْفُو	كَأَنَّ بَيَاضَ غُرَّتِهِ خِمَارُ
٥٥-	وَمَا يُذْرِيكَ مَا فَقَرَى إِلَيْهِ	إِذَا مَا الْقَوْمُ وَلَّوْا أَوْ أَعَارَوْا
٥٦-	وَلَا يُنْجِي مِنَ الْعَمَرَاتِ إِلَّا	بَرَكَاءُ الْقِتَالِ أَوْ الْفِرَارُ

(98) 訳

- 1) 共にまじわった人々は遠くへ去り¹⁾、訪ねることができなくなったが、お前の心はラクダにのって旅立った女たちの中を漂っている。
- 2) ラクダの御者は、まずナフルの水場を目指して進み、アバーン山とサルマー山の所で向きを変えた²⁾。
- 3) 女性たちがどこに進んで行ったか見通していると私が見なしている友人に、(私の恋心を気付かれないようにと、) 何も知らないふりをして尋ねた³⁾。
- 4) 私はウカイル族が私の恋人を連れて旅路に付くことを警戒していたが⁴⁾、警戒していたことが起こってしまった。
- 5) それ故、私はカーニアで、日が高く昇るまで⁵⁾、彼らから殆ど目を離さなかった。
- 6) 彼女らは夜には、アムール山とシャーバ山の辺りに来たが⁶⁾、後者の左側にはティール山があった。
- 7) ラクダの蓮台に乗っている女性たちは、まるで、アスヌマの地のカモシカのように美しい⁷⁾。カモシカは隠れ場に身を潜めているのだが、洞穴が浅く、体の一部が現れている。

1) al-khalīṭ 「交わった人」とは、詩人の一族と牧草地を共にした他部族のこと。

2) ʿabānāni 「アバーン山とサルマー山」、No. 15, 18 行参照。ナフル (nakhl、ナツメヤシの樹) という地名は各地にあるが、ここでは、メディナから二日行程のムッラ族の領域の地名と考えられる。

3) 女性に心を奪われていることを覚られないために、知っているが、さも知らないかのような質問を友人にすることを言ったもの。

4) jārātu-nā 「隣に住む女性、恋人、妻」の意味、No. 54, 1 行参照。

5) カーニア (qāniya) はスライム (Sulaym) 族の水場と解説にあるが、nafs qāniya 「羞恥心」の意味だとの説もある。つまり、恥じらいの気持ちを持ちながら、日が高くなるまで、彼らを見つめていたと詠んでいる、との説である。

6) シャーバ (Shāba) 山は No. 54, 9 行に既出。

7) アスヌマ (ʿasnuma) は sanam 「ラクダのこぶ」の複数 ʿasnuma が転じたものと考えられる。ʿusnuma, ʿasnuma と読み、各地にこの地名があった。ここではアルヤマーマの南のファルジュ (Falj) 近くの丘の名とされている。

- 8- 彼女らが唇を割ると、夜来の雲が降らせた雨できれいに輝いているカミツレの花のような純白の歯並びが現れる。
- 9- 蓮台に乗っている女性の中に陽気な乙女がいたが、彼女の一家は国許への旅を思い立ち、旅立った。
- 10- 困窮しらずでそだてられた女性の一人には、アルカシーマとアルウワールに住まいがあった⁸⁾。
- 11- 彼女には酸味があるラクダのミルクが毎日十分与えられる。また、妊娠10ヵ月のラクダから搾りたての純粋なミルクもふんだんに飲まされる⁹⁾。
- 12- 彼女は足首の辺りはふくよかで美しい乙女で、腰や腹はすりと引き締まっている。
- 13- お尻は立とうとするとき、重々しく、急いで立つと、息切れがする。
- 14- 私は夜通し一睡もせずに過ごした。まるで、私の関節にブドウ酒が行き渡ったようであった。
- 15- 私は空の大熊座の星を見つめていた。この星座は、野牛の群れが向きを変えて進むように(北極を軸として)回った¹⁰⁾。
- 16- 夜になってひと時が過ぎると、昴星は沈み、代わって、カペラ座の星がその隣に現れた。
- 17- おお、人々よ、時の長さにあえいでいる男を助けてくれ。なぜなら、(彼が戦争のため)身動きできなくなってから久しいからだ¹¹⁾。
- 18- ウカイル族の女たちが遠くに行ってしまったなら、(我らの心は)彼女らと共にかの地に捕らわれてしまった。
- 19- 我らと彼女らが(楽しく暮らした)日々は(長期に及んだが)、戦争が我らを別れさせたため、短いものとなった¹²⁾。
- 20- 私は、幾夜も私に思いとどませようとする者の忠告に従わず、腰布が足首の上まで垂れたままにしていた¹³⁾。
- 21- 私は私を咎める者に逆らい、悦楽を求め、妬む者を訪ねて傷つける。
- 22- 我らが人々は敵になったと見たときには、彼らとの間には和平のための交渉の余地はなくなっていた。
- 23- 我らの祖先は移住して、かつてニザール族が敬遠した土地にテントを張って住むことにした¹⁴⁾。

8) アルカシーマ (al-Qaṣīma) はアルクサイマ (al-Quṣayma) とも言われ、No. 44, 30 行で既出。アルウワール (al-Uwār) はここでのみ用いられている地名である。これらの土地は上カシームのアサド族の土地で、女性の部族ウカイルは詩人の部族の豊かな牧草地で一緒に放牧していたことを物語っている。

9) この女性は、どのようなときでも十分な食べ物を与えられ、裕福に暮らしている。それが彼女を美しくしている、と言ったもの。

10) 大熊座が北極軸をゆっくり回る姿を、野牛の群れが草を食べながら向きを変えて進む姿に比している。この星座は朝の光で消えるまで、一晩中光っている。

11) 包囲されて久しい、とは、戦争でラクダの放牧が出来ない状態が長期に及んでいることをさす。yā la- (属格) は救助の呼びかけ、yā li- (属格) は驚きや感嘆をあらわす。

12) 楽しい時は、長期にわたっても、短く感じられることを言ったもの。

13) al-zizār 「腰布」は平穏さのシンボルをなすもので、危険な仕事にとりかかるときには、巻き上げる。

14) ニザール (Nizār) はラビーアやムダルなどの北アラブ (マアッド) の祖先とされている。詩人の属するアサド族は、かつて、危険な土地に住んでいたと言っている。

- 24- (アジャーとサルマーの) 二山によるタイイ族が戦争の火をつけ、(そのため遠くのオマーンの) スハールの人々さえ戦争の苦痛に悲鳴をあげた¹⁵⁾。
- 25- 彼らは我ら(が寄せてくるの)を見て、山道を塞いだが、たとえ、彼らが巢穴に隠れても、我らから救われはしない。
- 26- スバイ族はクラーディヤに住んでいたが¹⁶⁾、我らは彼らをぐるりと囲んでいた。
- 27- アムル・ブヌ・アムルは彼の部族に戦いをしないようにと命じた¹⁷⁾。勝利する力を持ちながら(このような命令を下すとは) 鼻を切り落とした男のようなものだ。
- 28- 彼らはザート・カフフで和平を提案した。しかし、和平の味は彼らにとっては、サラウやカールのように苦いものであった¹⁸⁾。
- 29- アッリバーブは(ネジド) 高原に登つ(て逃げ) たが¹⁹⁾、サラートにも、アルフブスにも火の気はなかった。
- 30- 彼らは我らとはるかに離れていたが、我らが(彼らの) 内緒話まで聞こえるような近くにいて思っていた。
- 31- 我らへの恐怖のため、サアド族は(下の) 土地に降ろされた²⁰⁾。そこでも彼らは人々を保護しようとしたが、保護されようとはしなかった。
- 32- アーミル系の部族で、我らに最も接近していたのは、アルマナーラのウカイル族とアルウバール族であった²¹⁾。
- 33- フザイマ族には昔の栄光と純粋な血統が備わっているため、彼らは(屈服を) 拒絶した。
- 34- 彼らは生まれながらの高貴な性質を有し、どこに住もうが、いずこに移住しようがマアッド(系の部族) より、勝っていた。
- 35- 彼らは我らと契約すると、誠実であり、人々が(冬季の食糧不足のため) 焼き肉の匂いを好むとき、直ちにマイシルゲームにとりかかる。
- 36- 逃げたヌマイル族から²²⁾、谷底は軍馬がどよめき、そのひづめによって、土ぼこりが舞い上がった。
- 37- キラーブ族だが²³⁾、彼らは逃げたところで、逃亡が彼らを救いはしない。

15) Ṭayyū l-jabalayni 「二つの山のタイイ族」とは、アジャー (ʿAjaʿ) とサルマー (Salmā) 山を拠点としたタイイ族のこと。今日では、ジャバル・シャンマル (Jabal Shammar) の名で知られている。スハール (Ṣuḥār) はオマーンの首都、このような遠いところは、この戦いと何の関係もなかったと思われるが、詩的誇張表であろう。なお、この戦争の詳細は良く分かっていない。

16) スバイ (Subayʿ) 族はズブヤーン系の部族。取り囲んで苦しめたのか、他部族から守ってやったのか不明。クラーディヤ (Qurādiya) は地名として用いられているが、カイロ版ではクラーディバ (Qurādiba) となっている。

17) アムル・ブヌ・アムルはタミーム系のダーリム族の族長。不戦を命じたのは、ズー・ナジャブの戦いでのこと。

18) salaʿ 「苦い樹」、qār 「タール、戦争、苦い樹」。和平提案は、かえって、厄災をもたらすものであった、の意。

19) アッリバーブは、タミーム系のダッバ、サウル、ウクル、タイムなどの諸部族連合のこと。

20) サアドとは、タミーム系の雄族サアド・ブヌ・ザイド・マナートのこと。

21) アルウィバール (al-Wibār) とは、ワブル・ブヌ・アドバト・ブヌ・キラーブ (Wabr b. ʿAḍbaṭ b. Kilāb) のことで、アーミル・ブヌ・サアサア系の部族。

22) ナマイル (Numayr) は、アーミル・ブヌ・サアサア系の部族。

23) バニー・キラーブ (Banī Kilāb) の代わりに、バニー・バギード (Banī Baghīd) または、バニー・スバイ (Banī Subayʿ) とする伝承もある。

- 38- スライム族は²⁴⁾、我らを恐れて、食べ戻した食べ物を、ロバのように、飲み込めず、沈黙していた。
- 39- 半陰陽のアシュジャウ族はアッシャジーの雄ヤギのように²⁵⁾、メーという鳴き声をあげながら、退いてしまった。
- 40- 我らは、ムッラ族が退いても、意に介さなかった。彼らは、ハーリバ族が、かつて、通った道をたどり低地に降りて行った²⁶⁾。
- 41- 君が我らの消息を伝えてくれるなら、わが兄弟部族キナーナに、彼らがどこにしようと、(以下のことを) 伝えてくれ²⁷⁾。
- 42- すなわち、我らは不在となった者の土地を我らのものとし、雨が降らず、人々が旱魃に苦しむとき、ネジドの一番高い土地を思うままに占領した、と²⁸⁾。
- 43- 我らは、いずれも生気みなぎり跳ね回り、道からそれがちな雌馬の鞍を腹帯で締めて出撃したが、見張りや、略奪戦で馬を損ねた²⁹⁾。
- 44- 馬は元気のあまり、手綱と戦うように引っ張り合うが、どの馬にも、土ぼこりのような黄色の一匹のバッタが住んでいるかのように(軽々と飛び跳ねた)³⁰⁾。
- 45- (獲物に向かって突進するときには) 馬の頬は汗でぬれて、まるで、鷲の翼の下に隠れているかのような私を馬は転がす。
- 46- 馬が前脚を一杯に伸ばして走ると、前脚の両肘が腹帯を後ろに押しやり、両乳首の間は土ぼこりが埋めてしまう。
- 47- 馬が汗の乾いたあと、灰色になっている姿を君は見るであろう。汗が多く流れたところもあれば、少しのところもある。
- 48- 馬がめぐった平地のいたるところには、ひずめの先の跡が付き、地平にへこみが出来ていた³¹⁾。
- 49- 君は多くの種馬の陰茎は、ブドウ酒商人が吊るしている(空の)皮袋を折りたたんだよう(に太いものだ)と思うであろう。
- 50- (そのような) 馬の鼻腔は、他の馬が静かな息づかいをしているときに、まるで、鍛冶屋から借りてきたふいごのよう(で大きな音をたてている)³²⁾。
- 51- 我らはタミーム族の書物の中で、“疾走するのに最適の馬は借りてきた馬”とあるの

24) スライム族はハーワジン連合の一員で、この連合では、アーミル・ブヌ・サアサアが最強の部族であった。

25) アシュジャウ (ʾashjaʿ) は注23にあるバギード族をさす。

26) ムッラはイブン・サアド・ズブヤーン (Ibn Saʿd b. Dhubyān) 族、ハーリバはイブン・ズブヤーン (Ibn Dhubyān) 族。

27) 詩人はキナーナ (Kināna) 族のことを、qawmī-nā「我が民」と述べているが、これは、詩人の部族アサドの父祖フザイマ (Khuzayma) がキナーナの父祖であることを念頭においてのことだろう。

28) sanam l-ʾarḍ「土地のこぶ」とは、ネジドの一番高いところ。後に、ダーリヤ (Dāriya) と呼ばれた。預言者のころはバヌー・キラブが住んでいた。カリフのウマルおよびウスマーンはこの良好な牧草地を ḥimā (保護地) として、戦利品として得たラクダの放牧地とした。古代にはキンダ王国の拠点であった。

29) 危険な場所での見張りや略奪戦で馬の被害を受けたの意。

30) 黄色のバッタは雄バッタをさす。雌バッタより軽快に飛ぶと言われる。

31) No. 97, 29行と、最後の単語が違うだけで、意味は同じ。

32) 借りてきたふいごは出来るだけ早く返さなければならぬので、急ぎ使用する。急ぐと、勢いで大きな音が出る。

に気づいた³³⁾。

- 52- 雄馬は夕方減量の訓練を受ける。強大な馬で、胴は細長く、四肢はよく伸び、駿足で、贅肉はついていない。
- 53- 他の馬が、早朝、早駆けして、髪を乱しているとき、雄馬の背は（水平で滑らかで）強く燃ったロープのようである。
- 54- 雄馬は一日中、ラクダの乗り手らと並んで早駆けしているが、馬の額の白い星は、婦人のヴェールのようにである。
- 55- 部族の者たちが、退却するか、襲撃するとき、私がどれほどこの馬を必要としているか、君は何によって知るか。
- 56- (戦闘での) 困難な状況から人を救うのは、ひとえに、不動の姿勢を保つか、逃走するか³⁴⁾のいずれかである。

33) この一行は前後と全く関係のないもので、ウマイヤ朝中期の詩人アッティリンマーフ (670-728) によるもの、との説もある。

34) アラブの詩人は、馬の理想的なありかたを、騎手の安全確保を基準においていたようだ。すなわち、あくまで戦うか、逃げるか、は如何に騎手を守るか、で判断していたようである。

— (99) ビシュル・ブヌ・アビー・ハージム —

بِشْرُ بْنُ أَبِي حَازِمٍ

まえがき

愛の序詞（1-7行）について、アンニサールの戦い（No. 96 参照）での詩人の部族アサドの勝利を誇った詩である。すなわち、アンニサールでアーミル・ブヌ・サアサアを撃破した件（8-15行）、この戦いで、タミームを率いたハージブ・ブヌ・ズラーラの敗走、昔、アサド族を支配したキンダ王国の王子フジュルに反抗して殺害したこと（16-17行）、アーミル・ブヌ・サアサア系の3支族、ヌマイル（18-19行）、キラブ（20行）、カアブ（21-22行）をそれぞれ敗北させた件などに言及している。カーミル調、22行。

(99) テキスト

وَقَالَ بِشْرٌ أَيْضًا

- | | |
|--|---|
| تَبْدُو مَعَارِفُهَا كَلَوْنِ الْأَرْقَمِ | ١- لِمَنِ الدِّيَارُ غَشِيَتْهَا بِالْأَنْعَمِ |
| إِلَّا بَقِيَّةَ نُؤْيِهَا الْمُتَهَدِّمِ | ٢- لَعِبَتْ بِهَا رِيحُ الصَّبَا فَتَنَكَّرَتْ |
| مَهْضُومَةَ الْكَشْحَيْنِ رِيًّا الْمِعْصَمِ | ٣- دَارٌ لِبَيْضَاءِ الْعَوَارِضِ طُفْلَةٍ |
| صَرَمَتْ حِبَالَكَ فِي الْخَلِيطِ الْمُشْتَمِ | ٤- سَمِعَتْ بِنَا قِيلَ الْوُشَاةِ فَأَصْبَحَتْ |
| طَرَفًا فُوَادُكَ مِثْلَ فِعْلِ الْأَيْهَمِ | ٥- فَظَلَّتْ مِنْ فَرْطِ الصَّبَابَةِ وَالْهُوَى |
| عَيْرَانَةٍ مِثْلَ الْفَنِيقِ الْمُكْدَمِ | ٦- لَوْلَا تُسَلِّيْ أَلْهَمَ عَنْكَ بِجَسْرَةٍ |
| خَطَارَةٍ تَهْصُ الْحَصَى بِمُثْلَمِ | ٧- زَيَّافَةٍ بِالرَّحْلِ صَادِقَةِ السُّرَى |
| وَهَلِ الْمُجَرَّبُ مِثْلَ مَنْ لَمْ يَعْلَمْ | ٨- سَائِلٌ تَمِيمًا فِي الْخُرُوبِ وَعَامِرًا |
| يَوْمَ التَّسَارِ فَأَعْقَبُوا بِالصَّيْلَمِ | ٩- غَضِبْتَ تَمِيمٌ أَنْ تُقَتَّلَ عَامِرٌ |
| نَشْفِي صُدَاعَهُمْ بِرَأْسِ مِصْدَمِ | ١٠- كُنَّا إِذَا نَعَرُوا لِحَرْبٍ نَعْرَةً |
| وَالْحَيْلُ مُشْعَلَةُ النَّحُورِ مِنَ الدَّمِ | ١١- نَعْلُو الْقَوَانِسَ بِالسُّيُوفِ وَنَعْتَزِي |
| حَبَبَ السَّبَاعِ بِكُلِّ أَكْلَفٍ ضَيْعَمِ | ١٢- يَخْرُجْنَ مِنْ خَلَلِ الْعُبَارِ عَوَاسًا |
| يَسْمُو إِلَى الْأَقْرَانِ غَيْرَ مُقَلَّمِ | ١٣- مِنْ كُلِّ مُسْتَرْخِي النَّجَادِ مُنَازِلِ |
| تَحْتَ الْعَجَاجَةِ فِي الْعُبَارِ الْأَقْتَمِ | ١٤- فَفَضَضْنَ جَمْعَهُمْ وَأَفْلَتَ حَاجِبُ |
| نُبَذَتْ بِأَفْضَحِ ذِي مَخَالِبِ جَهْضَمِ | ١٥- وَرَأَوْا عُقَابَهُمُ الْمُدِلَّةَ أَصْبَحَتْ |
| شَرَعُ إِلَيْهِ وَقَدْ أَكَبَّ عَلَى الْقَمِ | ١٦- أَقْصَدْنَ حُجْرًا قَبْلَ ذَلِكَ وَالْقَنَا |

- ١٧- يَنْوِي مُحَاوَلَةَ الْقِيَامِ وَقَدْ مَضَتْ فِيهِ مَخَارِصُ كُلِّ لَذَنِ لَهْذَمٍ
 ١٨- وَبَنِي نُمَيْرٍ قَدْ لَقِينَا مِنْهُمْ خَيْلًا تَضِبُّ لِثَائِهَا لِلْمَعْنَمِ
 ١٩- فَدَهَمْنَهُمْ دَهْمًا بِكُلِّ طِمْرَةٍ وَمُقْطَعٍ حَلَقِ الرَّحَالَةِ مِرْجَمِ
 ٢٠- وَلَقَدْ حَبَطْنَ بَنِي كِلَابٍ حَبْطَةً أَلْصَقْنَهُمْ بِدَعَائِمِ الْمُتَحَيِّمِ
 ٢١- وَصَلَفْنَ كَعْبًا قَبْلَ ذَلِكَ صَلَقَةً بِقَنًا تَعَاوَرَهُ الْأَكُفُّ مُقَوِّمِ
 ٢٢- حَتَّى سَقَيْنَاهُمْ بِكَأْسٍ مُرَّةٍ مَكْرُوهَةٍ حُسُونِهَا كَالْعَلَقَمِ

(99) 訳

- 1- 君が訪ねてきたアルアンウムの廃墟は、そも誰の住まいであったか。その跡形は毒蛇のまだら模様のようなだ。
- 2- 廃墟は東風に弄ばれて、かつての面影を変えているが、テントの周りの崩れた溝の跡だけが残っていた。
- 3- それは、両頬が柔らかで、肌の色が白い乙女の住まいであった。彼女の腰は細く手首のあたりはふっくらとしていた。
- 4- 彼女は、我らに関して悪口屋の話を聞いて、ついに、君との絆を切り、北（シリア）に向かう人々と一緒に旅立ってしまった¹⁾。
- 5- 君は（彼女への）慕情と恋情のあまり、まるで、分別を失った男のように、一日中、心を乱した²⁾。
- 6- 君がもし、他の雄ラクダに噛み傷をつけられた頑強な種ラクダのように活発な大型の丈夫な雌ラクダに乗って（旅立ち）悲しみを癒さなかったら（きっと分別を失ったことだろう）。
- 7- この雌ラクダは、鞍を乗せた体を左右に振って得意げに歩み、夜旅の勤めは申し分なくこなし、快活に尾を振り、足の裏で石を踏み砕く。
- 8- タミーム族とアーミル族に（我らとの）戦争がどのようなであったか尋ねよ。一体、（戦いの）経験ある者となし者と、同等であろうか。
- 9- タミーム族はアンニサルルの戦いで、アーミル族が殺されたので、激怒して（我らに戦いを挑んだが）不幸な結果を招いた³⁾。
- 10- 彼らが「戦争だ」と大声で叫びかけるときには、我らは常に、彼らの頭痛を強力な大軍で癒してやった⁴⁾。
- 11- 我らは敵の兜の真ん中に刀を振り下ろし、「某の子なり」と名乗る。また、我らの馬は喉元を返り血で染めている⁵⁾。
- 12- 我らの馬は恐ろしい形相をして土ぼこりの中から、野獣のような走り方で突進した

1) mush'im は「シリアに向かう」または「北に向かう」の意。

2) tarifan fu'āduka には訳のような意味と「明白な事柄が見えなくなる」の意味がある。

3) u'qibū でなく u'tibū 「満足させられる」との伝承もある。それだと「破滅で満足させられる」となり、一層、嘲笑の度合いが強くなる。

4) 「頭痛を癒す」とは「敵が勝つてやろうと考えているところを払拭してやる」の意味。ra's 「強大な大集団」の用例は、アムル・ブヌ・クルスームのムアッラカ45行にもある。

5) mush'ala は「燃えさし」のことであるが、焼き鏝（ごて）で皮膚病を治すことから類推して、血で染まっているのを血の印がついているとしたものだろう。

- が、(乗っている) 騎士は褐色のライオンのように勇ましかった。
- 13- 背が高く、剣のつり革を長く伸ばしている完全武装した騎士たちは、(馬から) 降りても完全武装した敵に剣が十分に届いた。
- 14- 彼ら(味方の騎士ら)は敵を打ち破り、ハージブは暗褐色の土ぼこりにまぎれて⁶⁾、消え去った。
- 15- 我らは驚が描かれた敵の軍旗を見たが⁷⁾、その旗は、薄赤色の毛爪を持ち、つかみ殺す強いライオンが描かれた味方の軍旗によって、倒された。
- 16- 彼ら(アサド族)はそれ以前に、フジュルを殺害した⁸⁾。槍が彼に向けられ、彼はうつ伏せになって倒れた。
- 17- 彼は立ち上がろうと試みたが、既に、鋭利でしなやかな槍の穂先に貫かれ(立ち上がれなかつた)。
- 18- 次に、ヌマイル族であるが⁹⁾、我らが彼らの騎馬隊に遭遇したとき、彼らの酋長は戦利品欲しさにぬれていた(涎をたらしていた)。
- 19- 我がほうの騎士らは、躍り上がる軍馬を駆って、彼らを攻め立てた。馬がひずめで地面を強くけり、激しく跳躍したため、鞍の皮製の止め輪が切れてしまった。
- 20- 我が騎馬隊はかつて、キラーブ族を蹂躪して(彼らがもといた土地に追いやり)¹⁰⁾、テントの柱にしがみつくようにした。
- 21- また、我が騎馬隊は、それ以前に、真っ直ぐな槍を手にして、次々に繰り出し、カアブ族を打ちのめした¹¹⁾。
- 22- あげくの果て、我らは、一口すするとコロシントのように過度に苦みのある苦汁を、彼らの杯に注いでやった。

6) ハージブ (Hājib) はイブン・ズラーラ (ʿIbn Zurāra) のことで、アンニサールの戦いで、タミームの司令官であった。

7) 驚の軍旗はタミームのもの、ライオンのそれはアサドのものと言われている。要するに、アサド軍が勝ったことを述べている。

8) フジュルはフジュル・ブヌ・アムル・アルキンディー (Ḥujr b. ʿAmr al-Kindī) のこと。すなわち、イムル・アルカイスの父。昔、アサド族を支配していた王であったが、アサドが背いて殺害したと言われている。

9) ヌマイル (Numayr) はアーミル・ブヌ・サアサア系の部族。

10) キラーブ (Kilāb) は18行と同じ系統の部族。ここでは、アサド族がこの部族を元の宿営地に追いやり、外に出られないようにしたとの意味。

11) カアブ (Kaʿb) も18行と同じ系統の部族。

— (100) シナーン・ブヌ・アビー・ハーリサ —

سِنَانُ بْنُ أَبِي حَارِثَةَ الْمُزَيِّ

まえがき

本名シナーン・ブヌ・アビー・ハーリサ・ブヌ・ムッラ (Sinān b. ʿAbī Hārithah b. Murra)。この詩人の短い詩は No. 100 と No. 101 に載せられている。詩人はガタファーンとムッラを率いたムッラの族長で、150歳まで生きた、などと伝えられている。彼はダーヒスとアルガブラーウ、シウブ・ジャバラ、アッラカムをはじめ、その他の戦いの日々に、関りをもった6世紀後半の詩人兼騎士で、気前よさで知られている。特に、彼と息子のハーリジャおよびハリムは、アブスとズブヤーンの間で長期にわたって争われたダーヒスとアルガブラーウの戦いを調停し、終結させたことで有名である (ズハイルのムアッラカ「まえがき」参照)。

この断片詩が詠まれた背景は、よく分からない。カーミル調、5行。

(100) テキスト

وَقَالَ سِنَانُ بْنُ أَبِي حَارِثَةَ الْمُزَيِّ

- ١- قُلْ لِلْمُثَلَّمِ وَابْنِ هِنْدٍ مَالِكٍ تَلَقَّ
 ٢- الَّذِي لَأَقَى الْعَدُوَّ وَتَصْطَبِخَ
 ٣- نَحْبُو الْكُتَيْبَةَ حِينَ يَفْتَرِشُ الْقَنَا
 ٤- مِنَّا بِشَجْنَةٍ وَالذِّنَابِ فَوَارِسُ
 ٥- وَبِضَرْغَدٍ وَعَلَى السُّدَيْرَةِ حَاضِرُ
 إِنْ كُنْتَ رَائِمَ عِزِّنَا فَاسْتَقْدِمِ
 كَأْسًا صُبَابَتُهَا كَطَعِمِ الْعَلَقِمِ
 طَعْنَا كَالْهَابِ الْحَرِيقِ الْمُضْرَمِ
 وَعُتَائِدٍ مِثْلَ السَّوَادِ الْمُظْلِمِ
 وَبِذَى أَمَرَ حَرِيمُهُمْ لَمْ يُقْسَمِ

(100) 訳

- 1- アルムサッリムとヒンドの倅マーリクに告げよ、“もしお前が我らの威力を望むなら、攻めて来い”と¹⁾。
- 2- お前は (我らの) 敵が対面した者 (すなわち我ら) と遭遇し、朝、苦汁を飲むことになろう。杯の底にコロシントのおりが残っていたからだ。
- 3- 我らは、槍が入り乱れ、掻きたてられて燃え上がる炎のように突きかわされるとき、敵の軍団に接近した。
- 4- 我らの騎兵はシャジュナとアッジナーブおよびウターイドにあつて、まるで、暗闇のような黒い大軍団であつた。
- 5- さらに、ダルガドとアッスダイラの上にも、加えて、ズー・アマッルにも控えてい

1) 通告では2名の名を列挙しているが命令形は男性単数であり、両者の関係が不明。

た。彼らの妻女らは（敵に）分捕られるようなことはなかった²⁾。

2) 4 - 5行の地名はガタファーン族の領域内の地名とされている。ダルガド（Darghad）は今日でも用いられている地名で火山岩が多い土地である。

— (101) シナーン・ブヌ・アビー・ハーリサ —

سِنَانُ بْنُ أَبِي حَارِثَةَ الْمُرِّيِّ

まえがき

老境に達した詩人は衰弱して視力も衰え、ひとえに若い頃の功業に心の癒しを求める様を詠んだ詩である。この詩は息子のハーリジャ（*Khārija*, No. 100 「まえがき」参照）の作との言い伝えもある。バシート調、8行。

(101) テキスト

وَقَالَ سِنَانٌ أَيْضًا

- ١- إِنْ أُمْسِ لَا أَشْتَكِي نُصِي إِلَى أَحَدٍ وَلَسْتُ مُهْتَدِيًا إِلَّا مَعِيَ هَادٍ رَهْوًا
 ٢- فَقَدْ صَبَحْتُ سَوَامَ الْحَيِّ مُشْعَلَةً رَهْوًا تَطَالَعُ مِنْ غَوْرٍ وَأَنْجَادٍ
 ٣- وَقَدْ يَسَرْتُ إِذَا مَا الشَّوْلُ رَوَّحَهَا بَرْدُ الْعَشِيِّ بِشَقَانٍ وَصُرَادٍ
 ٤- ثُمْتُ أَطْعَمْتُ زَادِي، غَيْرَ مُدْخِرٍ، أَهْلَ الْمَحَلَّةِ مِنْ جَارٍ وَمِنْ جَادٍ
 ٥- وَقَدْ دَفَعْتُ، وَلَمْ أَجْزُرْ عَلَى أَحَدٍ، فَتَقَّ الْعَشِيرَةَ وَالْأَكْفَاءَ شُهَادِي
 ٦- قَدْ يَعْلَمُ الْقَوْمُ إِذْ طَالَتْ غَزَاتُهُمْ وَأَرْمَلُوا الزَّادَ أَنِّي مُنْفِدٌ زَادِي
 ٧- وَلَا أَجِيءُ بِسَوَاتٍ أُعِيرَهَا حَتَّى يَأُوبَ مِنَ الْقَبْرِ ابْنُ مِيَادٍ
 ٨- أَتْنُوا عَلَيَّ فَكَايِنٌ قَدْ فَتَحْتُ لَكُمْ مِنْ بَابِ مَكْرَمَةٍ تُعْتَدُ أَوْ وَادٍ

(101) 訳

- 1- 私が誰にも私の苦しみを訴えないようであれば良いのだが、今や、私は手を取ってくれる者がなければ、歩けなくなってしまった。
- 2- かつて、私は部族のラクダ（の放牧場所）で、低地や高原など各地から、肅々と集結する騎馬軍団を、朝、迎えたものである。
- 3- また、私はミルクが乏しくなった雌ラクダが、夕方、寒風にせきたてられて囲いへと帰ると、マイシルゲームを開帳し（人々に振舞つ）た¹⁾。
- 4- 私は、自身の食べ物を蓄えることなく、すべて、野営地の人々に、すなわち、庇護民と恵みを求める者の区別をせず与えた²⁾。
- 5- 私は、誰一人傷つけることなく、一族の分裂を防いだものである。私の同輩たちがそのことの証人である。

1) No. 62, 9-10行参照。食べ物が少ない冬の描写。

2) 気前の良さを述べたもの。

- 6- 部族の者たちは、彼らの略奪戦が長びき、食料を食べつくすと、私が自身の食糧を提供したことを知っていよう³⁾。
- 7- 私は、イブン・マイヤードが墓の中から帰ってくるまでは、人に責められるような卑劣なことはしない⁴⁾。
- 8- 私を褒めるが良い。私はお前たちのために、何と多くの功績の門を開き、また、何と多くの偉業の谷へ導く門を開いたことだろう。

3) 同じく、気前の良さを述べたもの。

4) アルアンバーリーのテキストでは、上の句は *lastu ghāshiya ʾakhlāqin ʿusabbu bi-hā* 「私は他人に責められるような性格を隠している者ではない」となっているが、カイロ版によって訳した。イブン・マイヤード (ʿIbn Mayyād) はウズラ (ʿUdhra) 族のイブン・マイヤード (ʿIbn Mayyāda) のことと言われ、それ以外のことは分かっていない。墓に埋葬された者が帰ってくることはないので、ありえないことのたとえ。すなわち「卑劣な行為はいつまでもいっさいしない」の意。

—— (102) ザッバーン・ブヌ・サイヤール ——

زَبَّانُ بْنُ سَيَّارٍ

まえがき

本名ザッバーン・ブヌ・サイヤール・ブヌ・アムル・アルムッリー (Zabbān b. Sayyār b. ʿAmr al-Murri)。

テキストではアルムッリーとしてムッラ族の出自としているが、祖先のズブヤーンを共にしているだけで、詩人はファザーラ (Fazāra) 族の系統に属する。すなわち、ムッラ族はイブン・アウフ・ブヌ・サアド・ブヌ・ズブヤーン、詩人の祖先はファザーラ・ブヌ・ズブヤーン (Fazāra b. Dhubyān) であるから、アルムッリーはアルファザーリーとするべきである。

彼の名は既に No. 8 のアルハーディラ「まえがき」で同時代の人物として言及しており、6世紀後半から7世紀前半、ファザーラ族の有力者兼詩人であった。

彼の息子マンズール (Manẓūr) はカリフのウマル (在位634-44年) と同時代の人物で、父であるザッバーンが没すると、父の妻で養母でもあったムライカ (Mulayka) と結婚し、ハーシム (Hāshim) およびアブド・アルジャッパール (ʿAbd al-Jabbār) という二人の息子とハウラ (Khawla) とトゥマーディル (Tumādīr) という二人の娘を得た。なお、養母で妻となったムライカは、No. 100, 101 の詩人シナーンの息子、ハーリジャの娘であった。『歌の書』11, pp. 55-56 によると、カリフのウマルはマンズールに養母との結婚は違法であり、離婚するよう命じた。つまり、マンズールはイスラームに入信しており、離婚の誓約をしないと、近親相姦の罪で死刑にされる場所であった。

離婚となったムライカは、タルハ・ブヌ・ウバイド・アッラ (Ṭalḥa b. ʿUbayd ʿAllāh) と結婚した。娘のハウラはタルハの子ムハンマドと結婚したが、夫がラクダの戦いで戦死したあと、アルハサン・ブヌ・アリーの子になり、アルハサン・ブヌ・アルハサンをもうけた。トゥマーディルは(第2次内乱でカリフを僭称した)アブド・アッラー・ブヌ・アズバイルと結婚した。No. 102 および103 の彼の詩はいずれも、同じ問題を取り上げている。すなわち、ファザーラの有力者である詩人ザッバーンと同部族の大多数を支配していたバドル一家との争いを取り上げた作品である。

詩人の頃のバドル一門の長は、ヒスヌ (Ḥiṣn) かその子のウライナ (ʿUrayna) であつたろう〔校正者注：注3ではウヤイナʿUyayna〕。本詩も次の詩も8行の断片詩であるが、両者の対立は『歌の書』16, p. 30 以下に詳しく取り上げられており、Lyll は『歌の書』やアルアンバーリーのテキストを参考にし、アルハバーア (al-Habāʿa) でのバドル家のフザイファ (Ḥudhayfa) 殺害事件を解説しているので、二つの「戦い」を中心にその概略を紹介する。

— フラカの戦い —

両者の争いは、フラカの戦い (Ḥuraqa) に関連していると考えられる。この戦いでは、両者は共にアルフサインに対抗した。しかし、本詩7行にあるように詩人は、バドル家に対して戦端を開く用意があると言うまでの対立関係になった。

フラカの戦いとは、ズブヤーン系のムッラー族と同じ部族のサフム家とシルマ家の争いで、前者には、弓を得意とするクダーア系のアルフラカと呼ばれたバヌー・フマイス (Banū Humays) が味方した。後者は同じく、クダーア系のバヌー・サラマーン (Banū Salamān) が味方した。両者はダーラト・マウドウと言うところで合戦し、アルフサインが率いたムッラ側が大勝を納めた (No. 10, 12, 90参照、特に12で詳述)。

— ダーヒスとアルガブラウの戦い —

ダーヒスとアルガブラウの戦いは、アブスとズブヤーンという兄弟部族の間の草競馬によって起こった。すなわち、アブスの族長カイス・ブヌ・ズハイルが所有していたダーヒス (Dāḥis) という雄馬と、ファザーラ家の長フザイファが所有する雌馬アルガブラウ (al-Ghabrā) にどちらが駿足であるかを競わせた。フザイファは、コースの途中に人を伏せさせ、ダーヒスが先に来ればはやし立ててコースを外れさせる策を用いて、自分の持ち馬アルガブラウに勝たせた。

カイスはこの不正な策に抗議したが、聞き入れなかった。これが争いの始まりで、最初は小競り合いにとどまっていたが、やがて、フザイファの兄弟アウフが殺されるという事件が起こった。このため、アブスは100頭のラクダを血債として支払った。しばらく後で、カイスの兄弟マーリクがファザーラの地で行われた結婚式に出かけたところ、フザイファの指示で殺された。そこでアブスは、アウフが殺害されたときに支払ったのと同じ100頭のラクダ、および、アウフ殺害からマーリク殺害までに4年たっているのも、その間の100頭のラクダが産んだ子ラクダを含めて支払うよう要求した。しかし、ファザーラ側はこれを拒み、何の措置もとらなかった。こうして両者が対立している間に、フザイファの兄弟マーリク・ブヌ・バドルが行方不明になったラクダを探しに出かけて、カイスの祖先にあたるラワーハー門のある男に射殺された。

この事件は、アブスの族長アルアスラウが部族の有力者の子弟を多数 (彼自身の息子3人を含む) を人質として差し出し、人質はズブヤーンのサアラバ・ブヌ・サアド家の長スパイウに預けるとの条件で和解した。スパイウはフラカの戦いで中立を保った。さて、スパイウは死期が迫ると、息子のマーリクを呼び、「お前がこの子たちを無事に預かっておれば貴人の名声を得よう。だが、私が死ねば、お前の伯父フザイファが訪ねてきて、涙を絞り出しながらかご当主がなくなられたなどと甘言をあやつり、この子らを引き渡すようお前を説得するだろう。彼はこの子らを、殺してしまうだろう。そうなれば、あらゆる名誉はお前から永遠に去るであろう。お前が彼に抗しきれないと恐れたなら、この子らは親元に帰してやれ。」と言った。

だが、事態はスパイウが予言したとおりとなった。フザイファはマーリクに父の死を嘆いて見せ、悲嘆と同情を巧みに口上して彼の心を捉え、人質を受け取り、本拠としているヤアムリーヤ (Ya^ʿmurīya) へ連行してしまった。なお、マーリクの母はバドル家の出で、フザイファの姉妹であった。

人質を連れ帰ったフザイファは、毎日、人質を一人ずつ引き出し、弓矢の標的にして射殺した。射るときには、若者に父の名を名乗らせ、射殺してその声を中断したと言われている。

このような残虐な殺害に、アブスは激昂して、ファザーラとサアラバ・ブヌ・サアド両者 (いずれもズブヤーン系) に対して戦端を開き、アルハーシラ (al-Khāthira) というところで、人質を渡したスパイウの息子マーリクをはじめ、多くの敵方の有力者を殺した。フザイファ自身はこの戦いには加わっていなかったが、彼は直ちにガタファーン系の諸部族からなる大軍を編成し、アブスを殲滅しようとした。

この状況を察知したアブスの族長カイスは、居所を捨ててどこかに避難することにし、夜間を利用して女、子供、家財および家畜などを引き連れて避難した。夜明けごろ、アルムウニカ (al-Mu^ʿniqa) の山の背で、敵軍が追ってくるのを見た。そこで、カイスはすでに先行した者たちとは違う道を通るように部族員に告げた。

フザイファは分岐点に来ると、荷駄が進んだ道を選びまもなく追いついた。そこで、アブスのラクダ、子女、従者らに襲い掛かり、全軍が戦利品を手に入れようと散開した。その際、フザイファはカイスの母トゥマーディルを槍で突き殺している。

他方、襲われた荷駄隊とは違った道を通ったカイスの軍勢は敵の背後から現れ、戦利品に気を奪われていた敵になだれ込んで、抵抗する暇も与えず大虐殺を行った。

アブスのリーダー格のジャード家の者たちが、「相手は縁者だから、これ以上殺すな。」と説得するまで殺害が続けられた。しかし、敵将、フザイファと彼の兄弟ハマルおよび一家の者たちは逃げてしまった。

カイスは偵察を各方面に出し、探らせた。そのなかで、シャッタード・ブヌ・ムアーウィヤ (ムアッラカ詩人アンタラの父、アンタラもこの戦いで名声を得た) の隊がフザイファの足跡を見つけた。フザイファは馬の腹帯が緩んだので締め直そうとして、馬から降りて足を石の上に置いたが、乗り直すとき、足が滑って地面に足跡を残してしまった。シャッタードは馬の足跡を頼りにして追跡した。その日は非常に暑く、フザイファはアルハバーア (al-Habā'a) の井戸に着くと、大きな水槽のそばで馬の鞍を外し武器や上着も脇において、水槽に顔をうずめて水を飲んだ。彼には、兄弟のハマル、ハナシュ・ブヌ・アムルおよびワルカー・ブヌ・ビラールなどが一緒にいた。彼らが水を飲んでいる間、鞍を外された馬たちは地面に寝転がっていた。彼らはこのようにしながらも偵察を出し、追跡してくる者を警戒していた。やがて、偵察の一人が戻ってきて、ガチョウのような姿をした者、藪に止まっている鳥のような者を通して来た方向で見かけたと報告した。

すると、ハマルが、「それは、たぶんジルワ (Jirwa) に乗ったシャッタードであろう。」と言った。ジルワとは、シャッタードの雌馬のことである。フザイファは「シ

ャッダードとジルワがあちらにいた、こちらにいたのだと言うな。」と言いつけた。彼らがこのように話している間に、シャッダードは彼らと彼らの馬の間に乗りつけてしまった。そこへアムル・ブヌ・アルアスラウ、キルワシュ、アルハーリス・ブヌ・ズハイルおよびジュナイディブが駆けつけ、あわせて5名となった。

ジュナイディブがフザイファの馬を遠ざけ、アムル・ブヌ・アルアスラウとシャッダードが水槽の側にいた敵を襲った。するとフザイファが、「アブスの衆よ、あなた方の知恵はどこに置かれたか。分別を失われたのか。」などと言って話し合いをしようとした。しかし、ハマルはフザイファの肩を叩いて、*ittaqi maʿthūra l-qawli baʿda l-yawmi*「今日以降、人々にどのように言われるか、気をつけなされ。」と忠告した。この言葉は以後、諺になった。

そのあと、キルワシュがフザイファを、またアルハーリス・ブヌ・ズバイルがハマルを倒したが、ハナシュは逃げた。アルハーリス・ブヌ・ズハイルはハマルが持っていた名剣ズー・ヌーン (*Dhū Nūn*) を奪ったが、もとはマールク・ブヌ・ズハイルの剣であった。この剣には魚 (*nūn*) が刻印されていたので、*Dhū Nūn* と呼ばれた。この剣の所有者は、マールク・ブヌ・ズハイル (アブス)、ハマル・ブヌ・バドル (ファザーラ) 次いでアルハーリス・ブヌ・ズバイル (アブス) へと移り変わり、そのたびに、前所有者の殺害者となったと言われる。

さて、カイス・ブヌ・ズハイルは水槽の側での殺害現場にはいなかったが、この知らせを聞くとハマル・ブヌ・バドルを悼んで、次の詩を詠んだ。

taʿlam ʾanna <i>khayra</i> n-nāsi maytun	ʿalā ẓahri l-habāʾati mā yarīmu
wa-lawlā <i>baghyu</i> -hu mā ziltu ʾabkī	ʿalay-hi d-dahra mā ʿala n-nujūmu
wa-lākinna l-fatā ḥamala bna badrin	<i>baghā</i> wa-l- <i>baghyu</i> martaʿu-hu wak <i>hīmu</i>
ʾazunnu l-hilma dalla ʿalay-ya qawmī	wa-qad yustajhalu r-rajulu l-ḥalīmu

最善の男がアルハバーアの水場で死に、もはや動かないことを知れ。
 彼が悪事をなさねば、私は生涯、星が昇る限り、泣いたことだろう。
 だが、この若者ハマル・ブヌ・バドルは悪事をなした。悪事の牧場は不健全だ。
 わが民は私に分別ある判断を示したと思う。思慮深き男も時に無知と見なされる。
 (アルアンバリー『注釈書』p. 694 所収。本詩は『歌の書』16, p. 32 で計9行。)

本詩はカーミル調、8行。

(102) テキスト

وَقَالَ زَبَّانُ بْنُ سَيَّارٍ بْنِ عَمْرِو الْمُرِّيِّ

- 1- أَبْنِي مَنُوءَةَ قَدْ أَطَعْتَ سَرَائِكُمْ لَوْ كَانَ عَنْ حَرْبِ الصَّدِيقِ سَبِيلُ
 2- وَبَنُو أُمَيَّةَ كُلُّهُمْ أُمَرَاؤُهَا وَبَنُو رِيَّاحٍ، إِنْ تُدْبِرَ قِيلُ
 3- سِيرِي إِلَيْكَ فَسَوْفَ يَمْنَعُ سَرَبَهَا مِنْ آلِ مُرَّةَ بِالْحِجَارِ حُلُولُ
 4- حَلَقُ أَحْلُوهَا الْفَضَاءَ كَأَنَّهُمْ مِنْ بَيْنِ مَنَبَجٍ وَالْكَثِيبِ قُيُولُ
 5- فَإِذَا فَرَعْتُ عَدْتُ بِيَزِي نَهْدَةً جَرْدَاءُ مُشْرِفَةُ الْقَدَالِ دُؤُولُ
 6- شَوْهَاءُ مِرْكُضَةٌ إِذَا طَاطَأَتْهَا مَرَطَى إِذَا أَتَبَلَّ الْحَزَامُ نَسُولُ
 7- أَعَدَدْتُهَا لِبَنِي اللَّقِيطَةِ فَوْقَهَا رُمَحِي وَسَيْفٌ صَارِمٌ وَشَلِيلُ
 8- وَمُجَرَّبُ النَّجْدَاتِ لَيْسَ بِنَاكِيلٍ عَنْهُ إِذَا لَاقَى الْقَبِيلَ قَبِيلُ

(102) 訳

- 1- マヌーラの子らよ、私はお前たちの指導者らに服従した。それは、味方との戦争を避ける道があればと願ったからである¹⁾。
- 2- (部族の集会で) 問題が議論される時には、ウマイヤの子らはすべて指導者で、リヤーフの子らも同様であった²⁾。
- 3- そなたは身を引け。ヒジャーズに住んでいるムッラー門の集団が部族のラクダを守るであろう³⁾。
- 4- 彼らは人々を広大な地域に住ませた。まるで彼らはマンビジュとアルカシーブの間で王侯のようだ⁴⁾。
- 5- 私が(助けを求める叫びに) 応えるとき、私の武器を備えた、短毛で首の長い、大型の雌馬は、かっかっとして短い歩幅で近寄った。
- 6- 体形は見事で、轡のはみを緩めて急がせると、早がけに転じ、腹帯が汗でぬれると

1) マヌーラ (Manūra) はファザーラの妻、sarāta-kum 「お前たちの指導者」とは、フザイファなどをさす。詩人もファザーラの血筋につながるが、フザイファとは途中で枝分かれした一家に属した。

2) バヌー・ウマイヤ (Banū 'Umayya)、バヌー・リヤーフ (Banū Riyāh) いずれもファザーラ系であろう。

3) sirī'ilay-ki 「そなたは立ち去れ」は、もともと離婚を告げる文句であった。2人称女性単数形で言及する女性が誰なのか分からない。ただ、ここで詩人ザッバーンがムッラに言及しているので、伝承者のアブー・イクリマは、詩人がムッラ族の出と思い、名前に al-Murri 「ムッラ族の」とした可能性がある。しかし、「まえがき」で述べたように、ムッラはアルフサイン・ブヌ・アルフマーム (No. 12参照) が属した部族であり、詩人はファザーラの族長ウヤイナ・ブヌ・ヒスヌ (Uyayna b. Ḥiṣn) に味方して、アルフサインと戦っている。

4) マンビジュ (Manbij) はシリアのユーフラテス河沿いの大きな町であった。アルカシーブ (al-Kaṭhīb) はアルバハラインの地名。アラブが住んでいる広大な領域で、王のようだと遊牧民に言っているが、これは痛烈な揶揄であり、軽蔑表現と思われる。

全速力で駆ける⁵⁾。

- 7- 私はこの馬をアッラキータの子らに対して⁶⁾、備えていた。馬には私の槍と鋭利な刀と鎖帷子が乗せてあった。
- 8- (また、その馬に乗っている私は) 幾多の難儀を経験しており、部族と部族が遭遇して戦うときには、ひるむことがない。

5) shawhā には「醜惡な」の意味もある。

6) アッラキータ (al-Laḳīṭa) はフザイファの妻。その子らとはヒスヌ、マーリク、ムアーウィヤ、ワルドおよびシャリーク (Sharīk) らのこと。この一行は、アルハバーアの水場での事件に関わるものであろう。

— (103) ザッバーン・ブヌ・サイヤール —

زَبَّانُ بْنُ سَيَّارٍ

まえがき

この詩は No. 102 と関連するもので、終始、バドル一門を中傷している。タウール調、8行。

(103) テキスト

قَالَ زَبَّانُ أَيْضًا يَهْجُو بَنِي بَدْرٍ

- | | |
|---|--|
| بَزَبَانَ إِذْ يَهْجُونَهُ وَهُوَ نَائِمٌ | ١- أَلَمْ يَنْهَ أَوْلَادَ اللَّقِيطَةِ عِلْمَهُمْ |
| لِسَانٌ كَصَدْرِ الْهَنْدَوَانِيِّ صَارِمٌ | ٢- يُطِيفُونَ بِالْأَعَشَى وَصَبَّ عَلَيْهِمْ |
| صَحِيفَتُهُ إِنْ عَادَ لِلظُّلُمِ ظَالِمٌ | ٣- وَإِنَّ قَتِيلًا بِالْهَبَاءَةِ فِي أَسْتِهِ |
| وَتُعْرِفُ إِذَا مَا فُضَّ عَنْهَا الْحَوَاتِمُ | ٤- مَتَى تَقْرَأُوهَا تَهْدِيكُمْ مِنْ ضَلَالِكُمْ |
| حَذَاكُمْ بِهَا صُلْبُ الْعَدَاوَةِ حَازِمٌ | ٥- لَدَى مَرْبِطِ الْأَفْرَاسِ عِنْدَ أَبِيكُمْ |
| يُنَبِّئُكَ عَنْهَا مِنْ رَوَاحَةِ عَالِمٍ | ٦- فَإِنْ تَسْأَلُوا عَنْهَا فَوَارِسَ دَاحِسٍ |
| إِذَا مَا أَلْتَقَيْنَا خَصْمَهُ لَا يُسَالِمُ | ٧- فَأَقْسَمَ مُرْتَا حَا شَرِيكَ بُنْ مَالِكٍ |
| بَلَى سَوْفَ تَأْتِيهَا وَأَنْفَكَ رَاغِمٌ | ٨- وَأَقْسَمَ يَأْتِي خُطَّةَ الضَّيِّمِ طَائِعًا |

(103) 訳

- 1- アッラキータの倅たちは¹⁾、ザッバーンが眠っていて問題にもしていないことを知りながら、彼を中傷するのを止めないのか。
- 2- 彼らは、夜盲症（鳥目）の男を連れ歩き²⁾、インド鉄製の剣の刃のような鋭利な言葉を注がれた。
- 3- アルハバーアの井戸で殺された男の尻には³⁾、悪行を働く者は悪運に帰する、と言う記録が残されている。
- 4- お前たちがそれを読めば、お前たちは迷いから正道に導かれよう。文書の封印が破

1) アッラキータ (al-Laḳīṭa) は No. 102 の注 6 のとおり、フザイファの妻。

2) al-ʿaṣhā 「夜盲症の男」は、大詩人マイムーン・アルアアシャーのことかも知れない。彼は部族の間を渡り歩いて、賞賛詩や風刺詩を読んだと言われている。しかし、注釈者アルアンバーリーはこのことに触れていない。

3) アルハバーアの井戸で殺された男とは、ハマル・ブヌ・バドルのこと。殺したのはアブス族のアルハーリス・ブヌ・ズハイル。ここでは、尻を槍で刺した傷跡のことを ṣaḥīfa 「記録、文書」と表現している。文字を知っていたことを表している。

- られると⁴⁾、(中味が) 知られよう。
- 5- 馬たちが繋がれているところ、すなわち、お前たちの父が横たわっているところで、敵愾心が強い優れた分別者がそれをお前たちに贈った⁵⁾。
- 6- もし、お前たちがそれについて、ダーヒスの騎士らに尋ねるなら、ラワーハ家の物知りが教えるであろう⁶⁾。
- 7- シャリーク・ブヌ・マーリクは⁷⁾ “我らは戦場で敵と遭遇すれば、決して和解はしない” と快活に誓った。
- 8- 彼は敗北は決して受け入れないと誓ったが⁸⁾、彼は敗北し、“お前の鼻は土ぼこりのなかに突っ込むだろう。”

4) al-Khawātīm「文書の封印」。槍の刺し傷を文書にたとえ、傷跡が何を物語るかは明白であると示唆している。

5) 「お前たちの父」とはフザイファ。「敵愾心が強い、優れた分別者」とはカイス・ブヌ・ズハイルのことと思われるが、カイスはフザイファが殺害された現場にはいなかった。

6) ラワーハ (Rawāḥa) はカイス (父ズハイル) の祖父にあたる。ダーヒスはアルガブラウと草競馬したところのカイス所有の馬の名前。

7) シャリーク・ブヌ・マーリク (Sharīk b. Mālik) は人物不詳。フザイファにもシャリーク (Sharīk) という名の子はあるが父の名が異なる。

8) ^ʾaqsama「彼は誓った」の次の否定の lā が省略されている。誓いが続く場合は、この省略がよく見受けられる (No. 35, 6 行参照)。

—— (104) ムアーウィヤ・ブヌ・マーリク・ブヌ・ジャアフアル ——

مُعَاوِيَةُ بْنُ مَالِكٍ بْنُ جَعْفَرٍ بْنِ كِلَابٍ

まえがき

本名は標記のとおり。この詩人は、アーミル・ブヌ・サアサア族の有名な一家の出である。父はマーリク・ブヌ・ジャアフアル、母はラビーア・ブヌ・アムル (Rabī'a b. ʿAmr) の娘で、同じく、アーミル・ブヌ・サアサア族の血筋につながるものであった。彼女は、ウンム・アルバニーナ (ʿUmm al-Banīna 「息子らの母」) と呼ばれていた。

詩人は5人兄弟の末弟で、兄弟はいずれもひとかどの人物であった。

長兄のアトゥフファイル (al-Ṭufayl) は No. 106 の詩を詠んだアーミル・ブヌ・アトゥフファイルの父である。この他の兄弟には、アーミル (アブー・バラウ ʿAbū Barā またはムラーイブ・アルアシンナ Mulāʿib al-ʿAsinna 「槍の使い手」などの名で知られた人物)、およびラビーア (ラビーウ・アルムクタリーナ Rabīʿ al-Muqtarīna 「貧者らの春」の名で知られた人物)、さらにサルマー (ニザール・アルマディーク Nizāl al-Maḍīq 「困難と闘う者」の名で呼ばれた人物) がいた。詩人自身にも。ムアウウィド・アルフカマーウ (Muʿawwid al-Ḥukamāʾ 「賢者らの訓練士」 という綽名がつけられていた。

彼らの中のラビーアは、ムアッラカ詩人ラビードの父に当たる。したがって、ラビードはこの詩人の甥であった。

『歌の書』16, p. 23 で、ラビードは次のように言っている。

naḥnu banū ʿummi l-banīna l-ʿarbaʿa wa-min kḥiyari ʿĀmir bni Ṣaʿsaʿa

我らはウンムルバニーナの4人の息子である。また、アーミル・ブヌ・サアサアの傑出者らの血を引く者。

これは明らかに、ラビードが父の兄弟を誇って読んだ一節であるが、兄弟が4人となっていて事実と異なる。このようにしたのは、詩の韻律をととのえる都合上のことか、または、彼の父が既に死亡していたためか、いずれかの理由によるものと言われている。

この詩はおそらく、もっと長いものであったと思われるが脱落が多く、断片詩のようになってしまっている。主題は自部族の賞賛に置かれている。カーミル調、12行。

(104) テキスト

وَقَالَ مُعَاوِيَةُ بْنُ مَالِكٍ بْنُ جَعْفَرٍ بْنِ كِلَابٍ وَهُوَ مُعَوِّدُ الْحُكَمَاءِ

- 1- طَرَقْتُ أُمَامَةً وَالْمَزَارُ بَعِيدُ وَهَنَّا وَأَصْحَابُ الرَّحَالِ هُجُودُ
- 2- أَنَّنِي اهْتَدَيْتِ وَكُنْتُ غَيْرَ رَجِيلَةٍ وَالْقَوْمُ مِنْهُمْ نُبَّةٌ وَرُقُودُ
- 3- إِنِّي أَمْرُؤٌ مِنْ عَصْبَةٍ مَشْهُورَةٍ حُشْدٍ، لَهُمْ مَجْدٌ أَشَمُّ تَلِيدُ
- 4- أَلْفُوا أَبَاهُمْ سَيِّدًا وَأَعَانَهُمْ كَرَمٌ وَأَعْمَامٌ لَهُمْ وَجْدُودُ
- 5- إِذْ كُلُّ حَيٍّ نَابِتٌ بِأَرْوَمَةٍ نَبَتِ الْعِصَاهُ فَمَاجِدٌ وَكَسِيدُ
- 6- نُعْطِي الْعَشِيرَةَ حَقَّهَا وَحَقِيقَتَهَا فِيهَا، وَنَغْفِرُ ذَنْبَهَا وَنَسُودُ
- 7- وَإِذَا تَحْمَلْنَا الْعَشِيرَةَ ثِقْلَهَا قُمْنَا بِهِ، وَإِذَا تَعُودُ نَعُودُ
- 8- وَإِذَا نُوَافِقُ جُرْأَةً أَوْ نَجْدَةً كُنَّا، سُمِّيَ بِهَا الْعَدُوُّ نَكِيدُ
- 9- بَلْ لَا نَقُولُ إِذَا تَبَوَّأَ حِيرَةً إِنَّ الْمَحَلَّةَ شِعْبُهَا مَكْدُودُ
- 10- إِذْ بَعْضُهُمْ يَحْمِي مَرَاصِدَ بَيْتِهِ عَنْ جَارِهِ وَسَبِيلُنَا مَزُودُ
- 11- قَالَتْ سُمَيَّةُ: قَدْ غَوَيْتِ، بِأَنْ رَأَتْ حَقًّا تَنَاوَبَ مَالَنَا وَوُفُودُ
- 12- غَيِّي لَعْمَرِكَ لَا أَرَا أَعُودُهُ مَا دَامَ مَالٌ عِنْدَنَا مَوْجُودُ

(104) 訳

- 1- 旅仲間らが眠りにつき、夜が少し更けた頃、ウマーマ（の幻）が遠くから訪ねてきた。
- 2- 足が強いのに、そなたは（我らの宿場へ）どのようにして、迷わずにきたのか。旅仲間らの一部はまだ起きており、他のものは眠っている¹⁾。
- 3- 私は有名な一族の一員である。彼らは善行に努め、古くから、気高い栄光に包まれている²⁾。
- 4- 彼らは、彼らの父が族長であることに気づいた。彼らに備わった大きな度量と彼らの伯父や祖先が彼らの名声を助長した。
- 5- 生き物はすべてひともとの根から育つ。大木とて同じこと。人にも善行が多い者と劣る者がいる。
- 6- 我らは、その一族に正当な権利と適切なものを与え、（我らに対する）彼らの罪を許し、支配する。
- 7- その一族が我らに重荷を負わせれば、我らはこれを背負って立ち、これを繰り返せば、その求めに応じる。

1) 上の句は No. 62（アルハーリス・ブヌ・ヒッリザの詩）2行に同じ。1行目では旅仲間はすべて眠っていたとなっており、第2行と矛盾している。これは、序詞の一部が本来この詩のものではないことを思わせるものである。

2) ḥuṣḥud（単数 ḥāṣhid）「財産を善行に積極的に差し出すこと」。ʿaṣhamm は「高い鼻」が原義。ʿuṣbatun mashhūratun「有名な集団」とは banū ʿUmm al-Banīna つまり詩人の一族のこと。

- 8- 我らは、勇気や援助（を求める者）に出会えば、おお、スマイヤよ³⁾、敵に対して策をめぐらす。
- 9- 新参の隣人が一夜の宿を求めてきたとき、我らは宿営地への山道で難渋すると言って断るようなまねはしない⁴⁾。
- 10- 一部の者が新参の隣人にテントへの道を通るのを禁じたとしても、我らのテントへの道はよく踏み固められている（通りやすい）。
- 11- スマイヤは言った、“あなたは誤った”と。彼女は、客をもてなしたり、贈り物を授けたり、王への使節派遣で我らの貯えが減ると見たからである⁵⁾。
- 12- まさに、そなたの言うとおりに迷いかも知れぬ。だが私は、我らの財産が続く限り、このことを決してやめず、繰り返す行い。

3) 女性の名が序詞と異なっている。序詞の一部が他の詩のものであることを物語る。

4) 宿営地に新たにきて隣接地にテントを張らせてくれと頼まれれば、喜んで受け入れると述べたものであろう。

5) wufūd「使節団」。おそらくアルヒーラ王のもとへの使節団のことであろう。これには、王への贈り物や高官らへの賄賂などで、大きな出費が必要であった。

—— (105) ムアーウィヤ・ブヌ・マーリク・ブヌ・ジャアファル ——

مُعَاوِيَةُ بْنُ مَالِكٍ بْنُ جَعْفَرٍ بْنِ كِلَابٍ

まえがき

同人による No. 104 の詩より、この詩は脱落部分が少ない。この詩を詠んだ頃、詩人は相当の老年になっていた。1-10行の序詞においては、かつての恋人サルマーも、詩人と同じく若気の愚かしさに身を委ねるには、年を取りすぎていた。詩人は青春期の思い出にひたり、彼女が以前に住んでいた住居跡を訪れる。次いで、ラクダによる砂漠横断の旅に触れている。やがて、兄弟部族であったカアブ族の分裂を防いだ自己の政治力を誇っている。さらに、クライシュ族への血債を肩代わりしたことと言及し、クダーマとスマイルという二人の人物を褒め、最後に自部族の威力を謳っている。

詩人は第15行で、自身がムアウウイド・アルフカマーウ「賢者らの訓練士」と呼ばれる元になった文句を詠んでいる。このように、詠んだ文句が元で通り名がつけられた例は多い。ほかにムラッキシュ、ムサッキブ、ムマツザクなどの例がある。ワーフィル調、25行。

(105) テキスト

وَقَالَ مُعَاوِيَةُ أَيْضًا

- | | |
|---|--|
| وَأَقْصَرَ بَعْدَ مَا شَابَتْ وَشَابَا | ١- أَجَدَّ الْقَلْبُ مِنْ سَلَمَى اجْتَنَابَا |
| كَمَا أَنْضَيْتَ مِنْ لُبْسٍ ثِيَابَا | ٢- وَشَابَ لِدَائِهِ وَعَدَلَنَ عَنْهُ |
| فَقَدْ نَزَمِي بِهَا حَقْبًا صِيَابًا | ٣- فَإِنْ تَكُ نَبْلُهَا طَاشَتْ وَنَبْلِي |
| وَأَصْطَادُ الْمُحَبَّاءَ الْكَعَابَا | ٤- فَتَضْطَادُ الرِّجَالَ إِذَا رَمَتْهُمْ |
| وَأَبَ قَنِصُهَا سَلَمًا وَخَابَا | ٥- فَإِنْ تَكُ لَا تَصِيدُ الْيَوْمَ شَيْئًا |
| عَلَى نَمَلَى وَقَفْتُ بِهَا الرِّكَابَا | ٦- فَإِنَّ لَهَا مَنَازِلَ خَاوِيَاتٍ |
| كَمَا رَجَعْتُ بِالْقَلَمِ الْكِتَابَا | ٧- مِنَ الْأَجْزَاعِ أَسْفَلَ مِنْ نُمَيْلٍ |
| يُنَمِّقُهُ وَحَادَرَ أَنْ يُعَابَا | ٨- كِتَابَ مُحَبِّرٍ هَاجَ بَصِيرٍ |
| وَلَوْ أَمْسَى بِهَا حَيٍّ أَجَابَا | ٩- وَقَفْتُ بِهَا الْقُلُوصَ فَلَمْ تُجِبْنِي |
| كَأَنَّ عَلَى مَعَانِيهَا مَلَابَا | ١٠- وَنَاجِيَةٍ بَعَثْتُ عَلَى سَبِيلٍ |
| كَمَا سَافَرْتُ يَدَكِرُ الْإِيَابَا | ١١- ذَكَرْتُ بِهَا الْإِيَابَ وَمَنْ يُسَافِرُ |
| وَكَانَ الصَّدْعُ لَا يَعِدُ أَرْتَنَابَا | ١٢- رَأَيْتُ الصَّدْعَ مِنْ كَعْبٍ فَأَوْدَى |

- ١٣- فَأَمْسَى كَعْبُهَا كَعْبًا وَكَانَتْ
 ١٤- حَمَلْتُ حَمَالَةَ الْقُرَشِيِّ عَنْهُمْ
 ١٥- أَعُوذُ مِنْهَا الْحُكَمَاءُ بَعْدِي
 ١٦- سَبَقْتُ بِهَا قُدَامَةَ أَوْ سُمَيْرًا
 ١٧- وَأَكْفِيهَا مَعَاشِرَ قَدْ أَرْتَهُمْ
 ١٨- يَهْرُ مَعَاشِرَ مِنِّي وَمِنْهُمْ
 ١٩- سَأَحْمِلُهَا وَتَعْقِلُهَا غَنِيٌّ
 ٢٠- فَإِنْ أَحْمَدُ بِهَا نَفْسِي فَإِنِّي
 ٢١- وَكُنْتُ إِذَا الْعَظِيمَةُ أَفْطَعَتْهُمْ
 ٢٢- بِحَمْدِ اللَّهِ ثُمَّ عَطَاءِ قَوْمِ
 ٢٣- إِذَا نَزَلَ السَّحَابُ بِأَرْضِ قَوْمِ
 ٢٤- بِكُلِّ مُقْلَصٍ عَبْلٍ شَوَاهُ
 ٢٥- وَدَافِعَةٍ الْحِزَامِ بِمِرْفَقَيْهَا
 مِنَ الشَّنَانِ قَدْ دُعِيَتْ كِعَابًا
 وَلَا ظُلْمًا أَرَدْتُ وَلَا اخْتِلَابًا
 إِذَا مَا الْحَقُّ فِي الْأَشْيَاعِ نَابًا
 وَلَوْ دُعِيَا إِلَى مِثْلٍ أَجَابًا
 مِنَ الْجُرْبَاءِ فَوْقَهُمْ طِبَابًا
 هَرِيرَ النَّابِ حَادَرَتْ الْعِصَابَا
 وَأُورِثُ مَجْدَهَا أَبَدًا كِلَابًا
 أَتَيْتُ بِهَا غَدَاتِيذِ صَوَابَا
 نَهَضْتُ وَلَا أَدِبُ لَهَا دِبَابَا
 يَفْكُونُ الْغَنَائِمِ وَالرِّقَابَا
 رَعِينَاهُ وَإِنْ كَانُوا غِضَابَا
 إِذَا وُضِعَتْ أَعْنَتُهُنَّ ثَابَا
 كَشَاةِ الرَّبْلِ آنَسَتْ الْكِلَابَا

(105) 訳

- 1- (私の) 心は次第に、サルマーのことを忘れるようになった。彼女は年若い、彼ら（我ら）二人は共に白髪となったあと（青春の思い出を）断った。
- 2- 彼の同年の者たちも白髪となり¹⁾、彼から去って行った。まるで、君が着物を脱いでしまったようであった。
- 3- たとえ、今や、彼女の矢も、私の矢も的からはずれようとも、かつては長年、我らの矢は正しく的を射ていた²⁾。
- 4- 彼女は（乙女の頃には）男たちを射て虜にし、私は、ヴェールで顔を隠し胸を膨らませてきた乙女を捕らえたものだ。
- 5- 今日、彼女は何一つ獲物を得ず、彼女の狩人があきらめ、失望して帰ってくるようになってしまったが、
- 6- 彼女は、今や人影のない空虚な住まい跡をナマラーに残している³⁾。私は（その廃墟を訪ね）ラクダを止めた。
- 7- ナマラーより下の谷あいの湾曲部には、君が繰り返し筆で描いたよう（な線状の住居跡が残っている）⁴⁾。
- 8- それは、美しい飾り手、正しい綴り手、よく目が見える者の筆跡さながらで、彼は書き物を飾り、落ち度があると非難されるのを警戒している（かのようだ）。
- 9- 私はその住居跡に若い雌ラクダを止めたが、住居跡は私に何も答えてくれなかった。

1) 「彼」とは1行目と同じく「私」、つまり詩人のこと。

2) 二人の緊密な関係は、かつて揺るぎなかったことを、矢が的に正しく当たることに喩えている。

3) ナマラー (namalā) はメディナ近くの水場。

4) ヌマイル (numayl) は namalā の縮小形、親しみを込めた表現。住居（テント）跡を筆跡にたとえた例は多く見られる。ラビードのムアッラカ8行目など。

万一、そこに生き物がいたなら答えてくれただろうに。

- 10- 私は、しばしば、駿足な雌ラクダで旅立った。(ラクダは汗をかくと) 腋の下がマラーブで覆われたようになった⁵⁾。
- 11- 私は住居跡で、家に帰ろうかと考えた。私のように長旅に出た者は、とにかく、家に帰りたいと思うものだ⁶⁾。
- 12- 私はカアブ族の分裂問題を解決してやった。この問題は、彼らには取り繕うことができない深刻なものであったが、消滅した⁷⁾。
- 13- それまでは、分裂して多くのカアブと呼ばれかねない状態であったが、(分裂は避けられ) 一つのカアブ族となったのである⁸⁾。
- 14- 私は彼らに代わって、クライシュ族の男への血債として、ラクダを運んで支払った。不正と詐欺は私の欲するところではない⁹⁾。
- 15- 私は、集団の間で果たすべき義務が生じて問題になるとときには、あとに続く賢者らが私を見習うように彼らに訓練を施した¹⁰⁾。
- 16- 私はこのような行いではクダーマやスマイルに先んじたが¹¹⁾、この両名は同じような行いをするように呼びかけられたら、応じるであろう。
- 17- 私は、頭上の大空が、継ぎ当て用の皮ほどの部分しか見せないような(絡みついた) 困難から、人々を守った。
- 18- (他の) 人々は私と彼ら(私の仲間)を年老いた雌ラクダのように嫌っている。太ももを縛られて、ミルクを搾られるのを警戒してのことである¹²⁾。
- 19- だが、私は血債を負担するであろう。ガニー族がそれを支払うであろう¹³⁾。私はその栄光を永遠のものとしてキラーブ族に相続させる。
- 20- たとえ、その行いゆえに、私が自賛したとしても、当然なことである。あの朝、私が為した事はまさに、正鵠を得たものであったからである。

5) マラーブ (malāb) は香料の一種で、サフランに似ている。ここではラクダの汗をさす。

6) bi-hā の -hā は9行に続いている。10行ではラクダに話題が移っており、11行は10行と入れ替えるべきである。

7) カアブ (Ka'b) はアーミル・ブヌ・サアサア系の有力部族で詩人が属するキラーブ (Kilāb) の兄弟部族。カアブにはウカイル (Uqayl)、クシャイル (Qushayr) およびジャダ (Ja'da) などの支族があった。「取り繕うことが出来ない」とは「カアブ自身では解決できず、さじを投げていた」の意。

8) ka'b-hā の接尾代名詞は、部族の祖先アーミル・ブヌ・サアサアをさす。詩人の部族キラーブはカアブの兄弟にあたる。キアーブ (Ki'āb) とは、この兄弟や注7)で言及した支族(カアブと親子関係)などを含め、カアブ (ka'b) を複数形としたもの。

9) これで見ると、クライシュ族の男を殺しているが、詳細は不明である。おそらく、その血債の仕方をめぐってカアブは内紛を起こしたものと考えられる。

10) 詩人の通り名 mu'awwid al-ḥukamā '賢者らの訓練士'はこの1行による。al-ḥaqq は「血債の支払い、客のもてなしなど部族に課せられた義務」のこと。

11) クダーマ (Qudāma) およびスマイル (Sumayr) の両名はともに、バヌー・サラマ・アルハイル・ブヌ・クシャイル (Banū Salama al-Khayr b. Qushayr) の名士であった。つまり、カアブの支族員であった。

12) 年老いた雌ラクダは、ミルクを出させるために太ももを縛るので、苦痛をとまなう。つまり、他の人々は「圧力を加えられるのを警戒している」の意。

13) ガニー (ghanī) はアーミル・ブヌ・サアサアと同盟していた小部族。これで見ると、血債は形式上ガニーが支払うが、実際にラクダを提供するのは、詩人側、すなわちキラーブ族で、22行にある協力者と考えられる。

- 21- 重大な事件が彼ら（わが部族）を拉（ひし）ぐとき、私は敢然として立ち上がる。
弱々しく、この難局に歩みよることはない。
- 22- まず、神を讃えまつる。次いで、奪われた家畜や、捕らえられた者たちを解放して
くれた人々に感謝する。
- 23- 人々の土地に雲が雨を降らせ（草が育て）ば、たとえ彼らが怒っていても、（我らに
は威勢があり意に介せず）家畜に草を食べさせる¹⁴⁾。
- 24- 我らは（そこに放牧させるために）背が高く、四肢の長い大型の馬をことごとく送
る。走り疲れた馬の手綱を緩めると、元気を取り戻したよう（に走る）。
- 25- 馬が両肘で腹帯を押し上げるように走ると、まるで、秋草のなかにいる野牛が遠く
に獵犬を見つけて逃げるほど、早かった¹⁵⁾。

14) この行以下は、22行までとつながりがないので、大幅な脱落があるものと思われる。

15) *shā* には「羊、山羊、鹿、野牛」などの意味がある。ここでは、タラファのムアッラカ34行の例に従い「野牛」とした。アンタラのムアッラカ59行では、「雌羊（のような乙女）」となっている。